

ポケットタイムきらら

こいし金二

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ポケットモンスター×まんがタイムきららのクロスオーバー作品です。

ここはポケットモンスター、ちぢめてポケモンと呼ばれる不思議な生き物が住む世界。

少年少女達は15になると、ポケモンと旅するのが通例。

カロス地方の近くに存在する、エトリア地方と呼ばれる場所に住んでいる主人公の折部やすなもまた、先に旅立ったソーニヤを追いかけて、相棒のシユバルゴと旅立とうとしていた。

それは、そんな彼女たちと仲間の物語。

### 注意

①基本的にやすな視点ですが、まれに別人の視点になることや、三人称視点になります。

②キャラ崩壊というか、このキャラこんなこと言わない！みたいなところもあるかもしれません。

そういう場合も暖かく見守っていただけると幸いです。

③基本的に7世代までのポケモンが登場しますが、野生ではアローラの姿、ガラルの姿は出現しません。

そしてZ技は登場しませんが、メガ進化は存在します。

なお、サトシやロケット団といったアニメキャラはDPを基準としています。

④ 作者はバトル描写が苦手です。

⑤ 投稿は不定期です。

最終話までのおおまかな流れは決定していますけど。

以上のことを踏まえたうえで、楽しんでいただければ幸いです。

なお、PIXIVとアメブロでも投稿する予定です。

<https://ameblo.jp/chocolovesanma/>

<https://www.pixiv.net/member.php?id=22299671>

## 目次

第一話 「やすなの旅立ち！3人の出会い！」	1
第二話 「ヒマリシティ到着！はじめてのバトル！」	7
第三話 「302番道路！突然のピンチ!?」	12
第四話 「謎のサイコパワー！美しい鳥ポケモン！」	18
第五話 「アミネタウン！ひとときの休憩！」	23
第六話 「303番道路！はなこのゲット!?!」	28
第七話 「303番道路！琉姫からの取材バトル!?!」	34
第八話 「ビジブシティ！はじめてのジム戦！」	40
第九話 「ビジブシティ！はなこの初ジム戦！」	48
第十話 「304番道路！ピンチとヒーロー?」	55
第十一話 「304番道路！はなことナゾノクサ！」	62
第十二話 「イオンシティ！ゆのの悩みとコンテスト！」	68
第十三話 「イオンシティ！二次審査のコンテスト！」	72
第十四話 「イオンシティ！決勝戦のコンテスト！」	77
第十五話 「イオンのどうくつ！いきなり一人旅!?!」	84
第十六話 「イオンのどうくつ！いきなり一人旅!?! side Y」	

## 第一話「やすなの旅立ち！3人の出会い！」

「よーし！今日ついに私も旅立つぞー！」

私、折部やすな！

十中八九15歳！

このエトリア地方では、15歳になったら、家を出てパートナーのポケモンと旅をするのが一般的！

私の友達のソーニャちゃんは既に旅立ちちゃったけど、絶対ソーニャちゃんよりも強いポケモントレーナーになるよ！

「よろい！これから頑張ろうね！」

「シュバー！」

普通なら、この街に住んでるソトマ博士からパートナーになるポケモンを貰うんだけど、私はこのシュバルゴがパートナー！

カブルモの時に仲良くなつて、ソーニャちゃんのチョコボマキと戦わせたりバトルさせたりしていたら、進化したんだよね！

ソーニャちゃんのアギルダーには進化してからも勝ててないけど、ポケモンたくさん集めていつか勝つんだ！

「えーっと、ここはルミイタウンだから・・・一番近いジムはヒマリシテイかな！」

私が住んでいたルミイタウンは、街の南に海がある小さな街。

北の301番道路をまっすぐ進めばつけるから、そこに向かおうつと！

・・・というより、それしか道はないんだけどね。

でも、私の旅はどうなるんだろう？

どんなポケモンに会えるかな？

珍しいポケモン捕まえて、ソーニャちゃんに自慢してやるんだ！

「・・・あれ？(´▽`)/、ど(´▽`)/？」

それから15分後。

私は道に迷った。

あれー、おかしいなー？

「あのヤンヤンマ、私をトラップにはめるとはなかなかやりおる・・・む、あつちから物音が聞こえる！きつとそつちにいけばいいに違いない！」

私は音が聞こえてきた方に向かって駆け出す。  
すると・・・。

「チーくん、つぶらなひとみ！」

「チラー！」

「・・・うーん、ここからどうつなげれば、いいパフォーマンスができるのかな・・・？」

そこにいたのは、川岸で練習をしている様子の、チラーミイと一人の小さな女の子。

相手のポケモンはいないし、バトルじゃないみたい。

(・・・でも、何をしてるんだろ？)

気になったので、私は声をかけてみることにした。

「ねえ、何やってるの？」

「ひゃつ、え、えつと、誰ですか？」

「私は折部やすな。今日ルミイタウンから旅立ったんだ！」

「わ、私はゆのといえます・・・。」

ゆのと名乗ったその少女によると、同じく今日出発したみたいで、ここでコンテストのパフォーマンスの練習をしていたみたい。

私と違って、旅の目的はコンテストリボンを5個集めてグラウンドコンテストに挑み、優勝することだって。

ちなみに私はジムバッチを8つ集めて、ポケモンリーグに優勝するのが目標！

そしてソーニヤちゃんに自慢してやるんだ！

「なら、目的は違うけど一緒に旅しない？1人より2人の方が、きつと

楽しいよー！」

「えっ？それは確かにそうかもしれないけど……。じゃあ、よろしくおねがいします。」

「うん、よろしくー！」

「ところで、やすなちゃんはどんなポケモンを持つてるの？」

「ふっふっふ、よくぞ聞いてくれました！出てきてよろいー！」

よろいの入ったモンスターボールから、よろいを出す。

「これが私のパートナーさー！」

「えっと……。こういう時はポケモン図鑑を使えば……。」「

ポケモン図鑑を取り出して、私のよろいに向けるゆのちゃん。

ポケモン図鑑が起動し、音声がポケモンの説明をする。

へー、こうなつてたんだー。

「シユバルゴっていうんだ……。格好いいね。」

「でしょ？格好いいでしょ？……あ、そうだ！せっかくだし、ポケモンバトルしようよー！」

「う……。うん……。正直私、あんまり自信ないけど……。」「

「うん、じゃあ決まりだね！……ってあれ、川上からなんか流れてきてる。」

なんだろう、よく見えないけど、金髪で、手と足があつて、服を着ていて……。

「女の子!?」

川から流れてきていたのは、まさかの女の子。ちよっ、助けないよ！

「大丈夫!?この手に捕まって！」

「やすなちゃん、それじゃ届かないと思うよー！この枝に捕まって！」

ゆのちゃんと2人で必死にその女の子を助け出す。

どうしてそんなことになっちゃったかはわからないけど……。その女の子は思ったより元気そう。

「えっと、大丈夫？」

「なんで川に流されていたの？」

「うーんとね、モンスターボールを落としちゃって、ころがつて茂みに

入っていったのを拾おうとしたら、たまたまコクーンのスナギがたくさん落ちてきて、それが進化して追いかけられてたら、落ちてたきのみを踏んづけて転んで川に落ちちゃったんだ。それで、コイキングの群れに襲われたりワンリキーが投げた岩が飛んできたりして掴まれるところもなくて……。」

「そ、それはものすごい運が悪かったね……。」

私も運が悪いせいか、ソーニヤちゃんによく殴られてたけど、ここまでじゃないと思う。

「ううん、そんなことないよ。私はすっごくついてるよー！」

「……えっと、どこが？」

「だって、そのおかげで、こうして出会いがあったんだもん！私、花子泉杏！はなこって呼ばれてたんだ！2人は名前はなんていうの？」

わあーお、すっごいポジティブだあ……。

「えっと、私はゆの……。」

「私は折部やすなだけど……。」

「そのシユバルゴとチラーミイはゆのちゃんかやすなちゃんの手持ちなの？2人もポケモントレーナーなんだよね？一緒に旅してるの？」

「ううん、やすなちゃんとはさつき知り合ったばかりだよ。私もやすなちゃんも、今日旅立ったんだ。」

「わあ、おんなじだね！私も今日旅立ったばかりなんだ！パートナーはこの子だよー！」

そう言っつて、ボールを投げるはなこちゃん。

中から出てきたのは……ピンプクかな？

「この子はお母さんのラッキーから産まれたから、この子が産まれた時からずっと一緒なんだ！」

「プックー！」

はなこちゃんの言葉に元気よく反応するピンプク。

私とよろいみたいに、仲はいいみたいだね。

でも、私とよろいの方が仲がいいはずなんだい！

「この子といっしょに、私はジムバッチを8つあつめてポケモンリーグを優勝するのが私の目標なんだ！やすなちゃんとゆのちゃんもそ



うなの？」

「うん、私もジムバッチを集めてリーグ優勝して、私の友達のスーニャちゃんに自慢するのが目的なんだ！・・・そうだ、目的が一緒なら一緒に旅しようよ！」

「いいの？やったあ、ひとりよりも、みんなの方がきつと楽しいよね！」

「私はコンテストが目的だけど・・・はなこちゃん、よろしくね。」

「これからよろしくね、やすなちゃん、ゆのちゃん！これから楽しくなりそうだし、私達はとつてもついでるよ！」

「そういえば私、ここに来たのってヤンヤンマ追っかけてだったんだっけ。」

「確かに、はなこちゃんが言うように、ついてるのかも！」

「やっぱり私の強運伝説は本当だったんだ！」

「ところではなこちゃん、川に流されてたけど荷物は大丈夫なの？」

「うん、このバックのなかにポケモンずかんもモンスターボールも今日のごはんもそれ以外のも入ってるから・・・あれっ？」

「・・・はなこちゃん。言いくいんだけど、このバック、底に穴があいちゃってるみたい・・・。」

「「・・・」」

「はなこちゃんのバックにはポケモンずかんだけしか入ってなかった。」

「ポケモンずかんはポケモンのわざ受けても壊れないような防水加工されているから壊れてないみたいだけど・・・。」

「・・・(ゆらり)」

「・・・はなこちゃん、どこ行くの？」

「ちよつと食べられるきのみを探してくるね・・・。大丈夫、ムリすればマトマの実くらい辛さも行けると思うから・・・。」

「わーっ！ストップストップ！」

「ゆのちゃんと2人でひきとめる。」

「私とゆのちゃんの持つてきてた食糧を分けてあげたら、はなこちゃん喜んでくれた。」

そのままお弁当タイムになって、2人のことをもっと知ることができたかな。

## 第二話 「ヒマリシティ到着！はじめてのバトル！」

「まずはヒマリシティに向かうんだよね。」

「うん。やすなちゃんもはなこちゃんも知ってると思うけど、ジムがあるからね。前に家族で行った時にジムの外観見ただけだから、タイプとか形式とかはわからないけど……。」

「え？ジムあったの？……じゃなくて、もちろん知ってたさ！」

「やすなちゃん……。」

ゆのちゃんの目線が呆れてる……。

ち、ちよつと私の辞書に書かれてなかっただけで、知らなかったわけじゃないんだからね！

「じゃあ、まずはヒマリシティだね！」

「じゃあゆのちゃん、お先にどうぞ！」

本当は道がわからないだけなんだけどね！

それでもゆのちゃんは先導してくれたからついていくと、3分くらいで私がヤンヤンマみつけたあたりまで戻ってきた。

……あれー？

「あとはここからまっすぐいけばヒマリシティに……」

あれ、ゆのちゃんの言葉が不自然に途切れたけど、どうしたんだろう。う。

そう思ってゆのちゃんが見ている方向を見ると……。

「きゅん」

「仲間にしたい！チーくん、お願い！」

「チラー！」

コリンクがいた。

元気なポケモンは捕まえにくいから、まずはポケモンバトルで弱らせるために、ゆのちゃんはチラーミイを出す。

「チーくん、はたいてー！」

「チラー！（バシッ）」

「きゅっ！きゅー（パチパチ）」

「チーくん、かわしてもう1回はたいて！」

「チラー！（ヒュッ、バシッ）」

「きゅーん！」

ゆのちゃんのチラーミイがはたくを出してコリンクに当て、おかえしとばかりに放たれたスパークをかわしたチラーミイが、もういっぺんはたくを繰り返す。

2回はたかれたコリンクはけっこうなダメージを受けたはず！

「ゆのちゃん、今だよ！モンスターボール！」

「う、うん！おねがい、モンスターボール！」

ゆのちゃんが投げたモンスターボールがコリンクに当たって、コリンクがボールの中に入る。

ゆらゆらと揺れるボールを、私も含めた3人全員が固唾をのんで見守ってる。

やがて、カチンと音がたつてボールが静止する。

ゲット成功してみたみたい！

「やったあー！りーくん、これからよろしくね！」

ゆのちゃんは、今捕まえたコリンクに、りーくとニックネームをつけたみたい。

「ごめんねみんな、待たせちゃって。」

「ううん、それより初ゲットおめでとう！」

「いきなり仲間に会えるなんて、ゆのちゃんはすごくついてるね！」  
そのあとは特にポケモンに出会うことはなかったから、そのままヒマリシティに到着した。

「ヒマリシティ・・・ひさしぶりに来たけど、変わってないかな・・・。」

そこまで大きな街ってわけじゃないんだけど、なんだかひだまりのような暖かみがあるというか、優しい雰囲気がある街かな？

「じゃ、さっそくジム戦行ってみようっと！ゴーゴー！」

「ち、ちよつとやすなちゃん待って〜！」

「私もやすなちゃんの次に挑もうっと！」

ジムを探して私は走り出す。

それほど大きな街じゃないから、すぐにみつかったけど……あれ、ジムの中が暗い？

「おっじやましまーす！（ガチャガチャ）……あれ？鍵がかかっている？」

「もしかして、今ジムリーダーさんは留守なのかな？」

「どこか出かけてるのかもしれないし、ちよつと待ってみようよ！」

はなこちゃんの提案で、私達はジムの前で待つことに。

……でも、しばらく待つてもジムリーダーらしき人は誰も来ない。

「ジムリーダーはいつ帰ってくるのさ！こうなったら、こつちからさがしに行つてやるー！」

「……あれ？君達はここのジムの挑戦者？」

「「!?」」

もしかやジムリーダーが帰ってきた!?

ならば早速申し込まないと！

声が出た方にいたのはダブルを連れた、メガネをかけてる女性。

「そうです挑戦者です！ジムバトルを！」

「ごめんね、残念だけど私はジムリーダーじゃないんだ。本当のジムリーダーは多分、しばらく帰つてこないよ。」

「「えっ?」」

ジムリーダーしばらく不在なの？

ついてない。

「ところで君達、ジムバッチはいくつ持つてるの？」

「まだ0というか、今日ルミイタウンを旅立つたばかりですけど……。」

「……うーん、こう言う失礼かもだけど、それじゃここのジムリーダーと戦うのは厳しいんじゃないかな……。なんせ、ここは最後の

ジムつてポケモンリーグ公式ガイドブックには書いてあるし、ルールも4VS4だからね……。ほら、これがそうだよ。」

その女性が見せてくれたものを見ると、なにになに……。

「観覧車から見える夕日は嘘みたい綺麗だった。全てが赤の色に溶けている。……ナニコレ？」

「ここから朝日も見てみたいね。何気ない彼の一言に……小説、ですか?」

「えっ?……わーっ、正しいのはこっち!」

慌てた様子で取り替えられたのを見ると、確かにそう書いてある。

「コホン、さっきのは忘れてもらって……とにかく、ここに書いてあるように、このジムはバッチを7つ集めてから戦うことが推奨されているからね、最初に挑むなら、この街の西からアミネタウン経由でビジブシテイに向かうのがいいんじゃないかな。」

「あ、アミネタウンって私の出発地だ!」

「それなら、ビジブシテイに行く際、はなこちゃんが落としたあれこれを家から持ってこられるね!」

まあ、モンスターボールとかきずぐすりなら、私やゆのちゃんが分けてもいいし、フレンドリイショップで買えるけど……。

「……というか、今はそれしか道がないんだけどね。この街の東に行くと、あの人気な月刊きららを発行している会社があるコミルタウンがあるんだけど、そこに至る道は今、落石の影響で通行止めになっているからさ。」

へー。

ちなみに月刊きららを知らない人に説明しておこう。

月刊きららとは、漫画や小説等の娯楽からコンテストや強いトレーナーのレポート、ニュースやポケモンについての情報など、ボリュームたっぷりな一冊となっており、このエトリア地方では大人気なものななな!

……こうやって宣伝しておけば、お礼のひとつやふたつ、貰えてもおかしくないよね。

へい、カモーン!

「じゃあ、私はコミルタウンに用事があるからまたね。ダブル、レポート!」

とか言っていたらその人はレポートで消えた。

ダブルって確か、スケッチで別のポケモンの技を使うことができるポケモンだったっけ。

「じゃ、早速アミネタウンに行こう！」

「やすなちゃん、今から出たら途中で夜になっちゃうよ……。」

「そうだよね、ここはポケモンセンターでお泊まりが一番だよ！」

言われるまで気にしてなかったけど、2人が言う通り、太陽はもう沈もうとしてる……。

ポケモンセンターは旅しているポケモントレーナーを無料で泊めてくれる宿屋としての意味もあるから、今日はそこに泊まることになるかな。

「じゃ、3人でもっとお話ししようよ！」

「うん！」

こうして、私の旅の初日は終わった。

一緒に旅する友達も出来たしよかったよ！

### 第三話 「302番道路！突然のピンチ!？」

「今日こそ行こう！アミネタウン！」

「アミネタウンの案内なら任せて！私が案内するよ！」

翌日、ポケモンセンターで泊まった私達は、この街の西のアミネタウンに向かおうとしていた。

とはいっても、今この街から行けるのはアミネタウンとルミイタウンだけみたいだから、目的地は決まってるか。

「ところで、アミネタウンってどんなところなの？」

「えーっとね、かなり大きいトレーナーズスクールがあるよ。」

「はなこちゃんも通ってたの？」

「うん、そうだよ！ヒバリちゃんやぼたんちゃん、今どうしてるかな。」

はなこちゃんの話の聞いてみると、どうやら特に仲がよかった友達らしいんだけど、2人はシンオウ地方に今いるらしい。

同じように旅に出てるなら、私やゆのちゃんもこのエトリア地方を旅している間に会うかもなんて考えたけど、その線はナシみたいだ。

そんな風に話しながら302番道路を歩いてると、ふと草むらから視線を感じて振り返ってみたけど、なにもいなかった。

しげみも静かなまま。

「やすなちゃん、どうしたの？」

「なんか視線を感じたような気がしたんだけど・・・気のせいだったのかな？」

「えーと・・・何もいないよ？」

気のせいだったのかな？

でもやっぱり気になったから、しげみの方まで見に行ってみると・・・。

「ヤーン」



そこにいたのはヤドン。

「このぽやーつとしてる表情、可愛い！」

「やすなちゃん、なにかいたのー?」

「うん、ヤドンがいたー! よろい、お願い!」

「シユバー!」

「・・・ヤン?」

ゲットするためによろいを出したけど、ヤドンはよくわかってないのか、ぽやーつとした表情のまま。

「よろい、つつくー!」

「シユバー!」

よろいがヤドンにつつくを当てるけど、ヤドンはぽやーつとした表情のまま。

・・・効いてるのかなこれ?

「うーん・・・とりあえず、もう一回つつくー!」

よろいがもう一回つつくを当てたけど、ヤドンはやっぱり表情変えない。

「効いてるのか効いてないのかわかんないし、こうなったら・・・もうモンスターボール投げる!」

モンスターボールを投げてでもヤドンは避けず、ボールがヤドンに当たる。

そのままゆらゆらと揺れた末、ゲットに成功したけど・・・結局ゲットするまで動かなかったような・・・。

「よし、ならば名前はぽんやりだ! 本当はソーニヤって名付けたかったけど!」

とにかく、仲間が増えた!

待っててくれたゆのちゃんとはなこちゃんのもとに向かったら・・・ちよつ、はなこちゃんが怪我してるんですけど!?

「あ、やすなちゃんゲットできたんだね! おめでとう!」

「あ、うん、ありがとう・・・じゃなくて、はなこちゃんは何があったのさ!?!」

「はなこちゃんがチヨロネコがいたから撫でようと近づいたら、ひっ

かかれた末に逃げられたみたい……。一応、これで応急処置くらいにはなると思うんだけど……。チークンもご苦労様。」

「チラー！」

「ありがとゆのちゃん、チラーミイ！でもチヨロネコ、撫でたかったなあ……。」

聞いた話によると……。はなこちゃんはポケモンが好きで撫でようと近づけど、いつもひっかかれたりかみつかれたりして逃げられちゃうらしい。

ゆのちゃんとチラーミイで軽い手当てはしたみたいけど……。

~~~~~

「ねえニヤース、本当にジャリボーイはこの地方に来てんの？」

「間違いないはずなのニヤー。ジャリボーイが次はエトリア地方に向かうって言っていたのを確かに聞いたのニヤー。」

「その割には影も形も見えないぞ……。？電車を一時的に運休させたから、ジャリボーイがコミルタウンに着いたあとは、一番近いジムがあるビジブシティに向かうはずなんだが……。」

「ソオーナンス！」

やすながヤドンを捕まえた頃、少し場所は変わって302番道路の上空。

気球に乗った3人組……。いや、2人と人間の言葉をしゃべるニヤースが話をしていた。

「：お、あんなところにシュバルゴとチラーミイを連れたトレーナーがいるぞ。」

2人のうち、青髪の男の方が双眼鏡で地上を見てると何かを発見したようだ。

「チラーミイニヤ？なら奪ってサカキ様に献上すべきニヤー！」

「チラーミイ？サカキ様に献上するなら、あつちのシュバルゴの方が強そうではないんじゃないの？」

「そうでもないニヤ。チラーミイは尻尾で相手をきれいにする習性があるニヤ。ボスが森を歩いてる時、いきなり突風が吹いてしまい、髪や服が乱れ葉っぱが身体につくニヤ。ロケット団のボスとして、身だしなみは気にするサカキ様は当然困るニヤ。そんな時、ニヤー達が送ったチラーミイがいれば、しっぽで葉っぱを払い、服や髪もきちんとしてくれるのニヤ。そして、ボスとしての威厳を保つことが出来たサカキ様はこう言うのニヤ。『こんなに素晴らしいポケモンを送ってきたニヤース達には褒美を出さねばならないな。』・・・と。そうニヤれば・・・！」

「『エトリア征服スピード出世でいい感じ〜！』」  
「んで、シュバルゴの方はどうすんのよ。」

「シュバルゴはニヤー達が使うニヤ。強く育ててさらに強いポケモンを奪っていけば、最終的に誰もかなわないポケモン軍団が完成し、さらにサカキ様にお褒めの言葉が貰えるはずニヤー！ジャリボーイのピカチュウだつて、しっかりといただけけるのニヤー！」

「さつすがニヤース、あつたまいい〜！」

「よくし、そうと決まればジャリボーイは後回しだ！あのジャリリンク達からポケモンを奪うぜ〜！」

そんなことを話している彼らの名はムサシとコジロウ。

悪の組織ロケット団の一員である。

~~~~~

「そういえば、やすなちゃんが捕まえたヤドンつて、どんな技を使つてきたの？」

「うーん……。それが私が捕まえるまで、技どころか動きすらもしなかつたから……。」

「あはは、そうなんだ……。一応、ポケモンが覚えている技はポケモン

凶鑑を使えばわかるから、確かめてみたらどうかかな？」

「そんな機能あるの？ポケモン凶鑑って結構凄いなだね……。」

ゆのちゃんが教えてくれた機能を使って、ぽんやりの技を見てみると……サイコキネシス、ねむる、みずてっぽう、ド忘れみたい。

そんな風にぽんやりの技を確認していると……。

「チラッ!」

「シユバツ!」

まだボールに入れていなかったゆのちゃんのチラーミーと私のよろいが驚いたような鳴き声をあげたから、振り向くと、なんかニヤース型の気球から伸びたマジックハンドが、2匹を掴んだ。

って、ちよっ!?

「二ーっはっはっは!!」

「いきなりなにをするの!」

「チーくんを放して!」

『いきなりなにをするの!』『チーくんを放して!』の声を聞き!

「光の速さでやってきた!」

「風よ!」

「大地よ!」

「大空よ!」

「世界に届けよデンジャラス!」

「宇宙に伝えよクライシス!」

「天使か悪魔かその名を呼べば!」

「誰もが震える魅惑の響き!」

「ムサシ!」

「コジロウ!」

「ニヤースでニヤース!」

「時代の主役はあたしたち!」

「我ら無敵の!」

「二ロケット団!」

「ソオーナンス!」

「ロケット、団……?なんでもいいから、よろいを離してよ!」

「嫌だね〜！ペロペロバ〜っ！」

「きーっ！」

腹立つーっ！

「チーくん、モンスターボールに戻って！」

「そっか、その手が！」

「おっと、そうはいかないのニヤ。ポチっとニヤ。」

ロケット団と名乗ったあいつらがボタンを押すと、腕が動いて透明な容器に閉じ込められちゃう。

その容器に遮られて、私とゆのちゃんのボールの光は遮られて戻せない。

なら、どうにかしてあの容器を破壊しないと！

「よろい！体当たりで壊して！」

「無駄ニヤ！これは衝撃を吸収しやすい特殊なプラスチックで出来るから、たとえカイリキーに殴られてもビクともしないのニヤ！」

あのニヤースが言う通り、よろいとチラーミイが攻撃しても、ヒビひとつ入ってない。

「じゃあ・・・リーくん、お願い！あの気球めがけてスパーク！」

「きゅっ！」

「無駄だぜーっ！そんなん届くかっての！」

ゆのちゃんのコリンクのスパークも、気球には届かない。

・・・これって、非常にヤバくない？

「ハッピーは遠くに攻撃出来ないから助けられないけど・・・せめて気球を見失わないようおっかけようよ！」

はなこちゃんの言う通り、気球を見失わないよう必死に追いかける。

その時、私のポケットからひとりでボールが落ち、開いたことに私もゆのちゃんもはなこちゃんも全く気づいていなかった。

## 第四話 「謎のサイコパワー！美しい鳥ポケモン！」

「なーっはっはっは!!楽勝だったわー!」

「本当はジャリボーイのピカチュウを捕まえるためのメカだったから耐電性もバツチリだし、ジャリボーイがよく捕まえている飛行ポケモンにやられないように気球のほうもコーティングしてあるから、たとえあのジャリンコ達が飛行ポケモンを出してきてもこの気球は破れないんだよな、ニヤース?」

「ゴジロウの言う通りニヤー!この檻も気球も、伝説のポケモンレベルならともかく、並大抵のポケモンなら傷つけも出来ないのニヤー!」  
「まあそもそも、あのジャリンコ達、攻撃すら届いてなかったし、いつものでも問題なかったな!」

「二!なーっはっはっは!!『バキッ!』・・・は?」

ロケット団の3人が勝ちを確信し、高笑いをしていると、真下から何かが折れたような音が聞こえてくる。

下を見ると、容器をつり下げるアームがぼつきりと折れていた。

「何コレーっ!?!ニヤース、並大抵のポケモンなら傷ひとつつかないんじゃないの!?!」

「それが・・・予算の都合でそこはほとんど強化できてないのニヤ・・・。」  
「だとしても、こんな短時間支えてただけで折れるなんて手抜き過ぎだろー!」

「ニヤーは強化してないとはいっても例え檻の中にゴローニヤ3匹入っても折れないくらいの強度は持たせてたのニヤー!何か技を食らったとしか考えられないのニヤー!」

「あーっ!あたし達のスピード出世がーっ!」

「ソオーナンス!」

宙吊りにしているものが折れば、当然吊られていたものは落下する。

シュバルゴとチラーミィをいれていた檻は、そのまま落下していた。

くくく

「どうしよう……。この先はポケモンがいないと踏破出来ないような山脈だよ……。」

気球は北に向かっていて、北には険しい山脈が続いてるから私達じゃ到底追いかけれっこない。

気球の速度は遅いから、まだあんま動いてないし真下で追いかけてるけど……。

「やすなちゃん！ヤドンのサイコキネシスなら届くかもしれないよ！」

「そっか！ぼんやりは動かないけど、私が持つて走りながら技を撃つてもらえばいいんだ！……って、ぼんやりのボールがない！」

「ええっ!?!」

なんで!?!奴らに奪われたわけでもないのに!?!

慌てて探しながら走っていると、突然真上から、何かが折れたような音が。

上を見上げると、紫色の光のようなものが、檻を支えてる部分をばつきりと折っていた。

……何コレ？

見た感じエスパー技みたいだけど……。

……って考えるより先に落ちてくるのを受け止めないと！

「ハッピー！檻を支えるのを手伝って！」

「りーくんもお願ひ！」

はなこちゃんとゆのちゃんも、ポケモンを出して受け止めようとする。

そのおかげで、よろいとチラーミイを受け止めることが出来た。

良かったあ……。

「よろい、大丈夫？怪我とかしてない？」

「チーくんも大丈夫?」

「シュバー!」

「チラー!」

2匹とも元気そうで、ほんと良かった・・・。

でも人の大切なポケモンを取るなんて許せないよね!

「また奪いに来られないように、戻ってよろい!」

「チーくんもモンスタールボールに!」

ふう、これで多分ひと安心だね。

また盗りに来ないか警戒し、空に浮かぶ気球を3人で様子をうかがうも、諦めたようで気球は遠ざかっていく。

よかった。

「でもまさか、いきなりこんなことになるなんてね・・・。」

「一応、アミネタウンに着いたらジュンサーさんに伝えておこうよ!しやべるニャースなんて珍しいから、捕まえてくれるはずだもん!」

はなこちゃんの言う通りかもね。

「・・・あれ?あれってなんだろう?」

そう話していたら、空になにか綺麗なものが。

なんだろうあれ・・・?

「どうしたの?やすなちゃん?」

「ほら、あそこ!あそこになにか綺麗な鳥ポケモンが飛んでる!」

私が指差した方にいる鳥ポケモンらしきなにかは、綺麗な金色をして、どこか威厳と神々しさみたいなものを感じるし、通ったあとには虹ができてる。

・・・もしかして、ものすごいレアな伝説のポケモンかも!

すっごい感動した!

というかこの光景を見て感動しない人がいたら、木の下に埋めてもらっても構わないよ!

あの鬼のように無慈悲なソーニャちゃんだって、この場にいたら感動したはず!

ゆのちゃんも、はなこちゃんも、私も声を出さず、その金色の鳥ポケモンが見えなくなるまで見つめてた。



・・・って、あつ！ぽんやり探さないと！

って思ってた戻ってみると、ロケット団によろいを奪われたところだった。

というか・・・さっきまで気球が不自然に樹がなくなってるけど・・・

「もしかして、さっきの紫の光でアームを折ったのって・・・」

「ヤン？」

真相はどうかはわかんないけど、きつとこのぽんやりは凄いポケモンなんだよ！

~~~~~

「ねえニヤース、2匹はジャリンコ達に奪還されたけど、まだなんかメカ出してゲットしなさいよ。」

「無茶を言うニヤ。予算の都合であれしか用意してないのニヤ！一応アームはあるのニヤが・・・」

「あのジャリンコ達はもうボールに戻してるし、思いつきり警戒されてるからなあ・・・」

コジロウの言う通り、今やすな達はロケット団が乗っている気球にじっと注意を払っている。

「ジャリンコ達は今はなにもしてこないけど・・・こちらでも奪うことが出来ないから・・・」

「帰るー！」

「ソオーナンス！」

ロケット団は引き際を察知し、撤退を選択する。

やすな達から見えなくなるくらいまで移動したところでどうするか話し合っていた。

すると・・・

「・・・ん？あれはなんなのニヤ？」

「なんかおっきな鳥ポケモンみたいに見えるが・・・」

「そいつの後ろには虹が見えるわね。ビューティフルなあたしくらい輝いてるわ！」

「あれは絶対ものすごい貴重なポケモンニャー！さっきのチラーミイやシユバルゴよりゲットしたら・・・」

ニャースのその言葉の最中に、その金色の鳥ポケモンは気球を突き飛ばすようにして通りすぎていく。

それは通り道に邪魔な障害物があつたからどけて進むかのように。

先程ニャースが言っていた通り、この気球は伝説のポケモンならともかく、並大抵のポケモンでは傷をつけれられない。

だが、その一撃であつさりと気球は爆発し、ロケット団は吹き飛ばされる。

「なんであのジャリンコ達じゃなくて通りがかりのポケモンにやられなきゃいけないのよーっ！」

「俺達の予算と汗の結晶があーっ！」

「伝説のポケモンが本当に出てくるなんて酷いニャーっ！まだニャにもしてないニャにーっ！」

「ニャな感じっ！！！！」

## 第五話 「アミネタウン！ひとときの休憩！」

私がぼんやりをゲットしたり、ロケット団とか名乗る連中にとられたよろいやチラーミイを奪還したり、すごい鳥ポケモンを見たりした302番道路も終わり、私達はアミネタウンに到着していた。

アミネタウンもそこまで大きい街じゃないけど、雰囲気は良さそう。

「はなこちゃんの家ってどのへんにあるの？」

「わりとトレーナーズスクールに近いところだよ！」

「そういえば、かなり大きなトレーナーズスクールがあるんだっけ、この街には。」

「でもまずはポケモンセンターでポケモンを回復させて、さっきの3人組のことをジュンサーさんに報告しておかないとね。」

あ、そうだった……。

ゆのちゃんに言われて思い出し、ポケモンセンターによろいとぼんやりを預けてからジュンサーさんのところへ。

「Rの文字がついた赤髪の女と青髪の男、それとしゃべるニャース……。間違いないわ、それはムサシとコジロウね。」

ジュンサーさんに特徴を伝えると、思い当たることがあったみたい。

話を聞く限りだと、今回みたいに他人のポケモンを奪ったり、貴重なお宝を泥棒したりと悪事を働く集団で、カントーやジョウト等、かなり幅広い地方で働いていたみたい。

エトリア地方では目撃情報はなかったみたいだけど、私達が伝えたジュンサーさんは過去にトキワシティ勤務だったみたいで知っていたか。

「わかったわ。とりあえずエトリア全域に情報を流して手配するわ。ありがとね。」

ジュンサーさんの対応。

私達はお礼を言つて、去る。

捕まえたい気持ちはあるけど、私達のポケモンは戻ってきたし、あとはジュンサーさん達に任せるのがいいよね！

「じゃ、今度こそはなこちゃんの家にいこうよ！」

「うん！案内するよ！」

だから私達ははなこちゃんの家に行くことに！

これがソーニヤちゃんなら、部屋の中家捜ししたりアルバム勝手に見てからかったりできるけど、はなこちゃんだとそうはいかないかな。

呼び鈴を鳴らすと、中から出てきたのははなこちゃんに似てるころがある女性。

若いしお姉さんとかかな？

「・・・あら？あなた達は？」

「私達は・・・はなこ・・・はなこ・・・ねえゆのちゃん、はなこちゃんの本当の名前つてなんだっけ・・・？」

「え？えーつと・・・えーつと・・・。はなこちゃん、下の名前なんだっけ・・・？」

私もゆのちゃんも、はなこちゃんって呼んでるから、下の名前が出てこない・・・。

ゆのちゃんとひそひそ話して考えたけど出てこなかったから、ゆのちゃんは諦めて本人に聞いた。

「杏だよ！紹介するね、この2人は旅立ってすぐできた友達のやすなちゃんとゆのちゃんだよ！」

「あらあら・・・杏のお友達ですか。お2人も杏のように旅立たれたのですか？」

「はい、そうです。えつと・・・杏さんのお姉さん？」

ゆのちゃんがそう言った瞬間、はなこちゃんのお姉さん？はクラツとしたようにし、不思議そうにしている私達の前にスリッパを2足置く。

「私、杏の母親でございます。立ち話もなんですから、良ければ上がっ

ていつてくださいな。」

あ、はなこちゃんのお母さんだったのね。

そうは見えなかった……。

「ところで、旅立ってまだ2日しか経ってないけど、なにか杏は忘れ物でもしたの？」

「それがね、バッグに穴があいちやってポケモン図鑑とハッピーのボール以外全部なくなっちゃって……。」

「相変わらずなんだから……。この娘昔からドジなところがあつて……。まったく、誰に似たのかし『ラキラッキー!』いけない! ガスコンロの火、つけっぱなしだった!」

(遺伝だ……。)

ゆのちゃんと私の心の声が一致した瞬間であった。

はなこちゃんのお母さんの手持ちで、はなこちゃんのピンプクのおやだと思われるラッキーが伝えて慌てて消しに行ってる。

「とりあえず私の部屋に行こうよ!」

はなこちゃんに言われて、2階のはなこちゃんの部屋に向かう。

そこでアルバムとか見せてくれて、ひばりちゃんとはたんちゃんがどんな見た目だったのかも判明。

楽しくおしゃべりしていたらいつのまにか暗くなっていたから、私達はポケモンセンターに宿泊するため出ようとしたけど、はなこちゃんのお母さんの好意で泊めてくれることに。

ゆのちゃんがお礼として作った味噌汁が美味しかった!

そして翌日、穴をふさいだ(ゆのちゃんがヒマリシティにいる時に縫った)バッグに持ち物をしっかりと入れて、はなこちゃんの家を出発。

次の目的地はビジブシティ!

「……おっ? 確かお前は花小泉と……見かけない顔だな。もしかし

て旅をしているトレーナーなのか？」

そう意気込んでいたら、誰かが私達に話しかけて来た。

紫のツインテールの少しかっこいい女性だけど・・・誰？

「ああごめん、私の名前はリゼ。そのトレーナーズスクールの講師をやっているんだ。」

リゼさんというその人はトレーナーズスクールの講師みたい。

でも、わりと新任かつ小学校の先生だからか、はなこちゃんは面識はないって。

「電車なしでコミルやヒマリからジムがあるビジブに行くには、この街を通らないといけないからね。私は興味を持ったトレーナーと話をし、成長を見るのが好きなんだ。花小泉杏という生徒の名前は小平先生から聞いてたよ。」

「小平先生と知り合いなんですか？」

「そりゃあ学年が違うとは言っても同じ学園の教師だから、話をする機会くらいあるさ。・・・本当は親父と同じ特殊部隊にいたみたいで、向こうから話しかけられたわけなんだけど・・・。」

「?なにか言いました？」

「あ、いや、なんでもない・・・。」

よくわかんないけど、リゼさんのほうははなこちゃんを知ってるみたい。

・・・あ、そうだ！

「それなら、私の友達のソーニャちゃんを見かけませんでしたか？金髪でツインテールで、アギルダーを連れているんですが・・・。」

「私もこの街に来ている人全員を見てる訳じゃないからわからないが・・・。少なくとも私は見かけてないな。」

「そうですか・・・。ソーニャちゃんこの街に来てないのかな？」

ただリゼさんが見かけてないだけでも考えられるけど、ソーニャちゃんは別ルートとってるのかも。

「リゼせんせー!」

「はやくー!」

「おっと、すまない。生徒達が呼んでるから、私はこれで行くよ。最後

に、名前を聞いてもいいか？」

「あ、私は折部やすなです。」

「私はゆのです……。」

「やすなにゆのか。覚えておくかな。また会えるのを願っているよ。次に会ったら、ポケモンバトルと特訓でもしたいものだね。」

そう最後に言い残し、リゼさんは去っていく。

……結局なんだったのかな？

「……ねえ、2人はリゼさんから何か特別なものを感じた？」

「え？」

ゆのちゃんがいきなりそう言うけど……どういうこと？

少なくとも私は何も感じなかったけどな？

「……なら、私の勘違いかな。気にしないで。」

よくわかんないけど、ゆのちゃんは一人納得したみたい。

なにか特別なものって、どんなことだったんだろう？

よくわかんないや。

それより、今度こそビジブシテイにレッツツラゴー！

## 第六話 「303番道路! はなこのゲット!」

ジムがあるビジブシティに向かうため、私達は303番道路を歩いていた。

「いたんだけど・・・。」

「ねえゆのちゃん、まだなの・・・?」

ヒマリシティとアミネタウンがそこまで離れてなかったから、ビジブシティまでの距離もそれくらいだと思ってたんだけど・・・実際は相当長かった。

アミネタウンを出発したのは昨日で、既に野宿してる。

ちよくちよく休憩を入れつつもすっかり歩いてたのに、まだビジブシティらしき影は全く見えないや・・・。

野宿自体はキャンプみたいで楽しかったけどさ!

「正確なこととはわからないんだけど・・・多分今半分くらいじゃないかな・・・?」

「うえ・・・まだ半分・・・。」

「でも昨夜見た、イルミーゼとバルビートの群れは綺麗だったよね! やっぱり私達はすっごくついでるよ!」

「はなこちゃん、あの時バランスを崩したバルビートにぶつかられてたよね・・・?」

「でも私もバルビートも怪我してないから大丈夫だよ!」

「さ、さすがはなこちゃん・・・。ポジティブさは宮ちゃん以上だね・・・。」

「そういえばはなこちゃん、家でモンスターボールを確保したからポケモンをゲット出来ると思うんだけど、捕まえたりしないの?」

「うーん・・・。この子可愛いなって思ったポケモンはいたんだけど、すぐに逃げられちゃって・・・。私、ひばりちゃんのウソツキーとぼたんちゃんのヌケニン以外の野生のポケモンには基本的に好かれなみたいなんだよね・・・。」

それは確かに・・・。

まあでも、たまには寄ってきてくれるポケモンも多分いるはずだよ



!

「でも、1体じゃビジブジムに挑戦出来ないよ……?」

「それまでには捕まえないとね……。」

その後、レパルダスに餌付け作戦を試したら餌とられひっかかれて逃げられたり、寄ってきたスカンプーにすごい臭いのガスをふっかけられたり、ヒノアラシを撫でようとしたら背中から出された炎で攻撃されたりとはなこちゃんの生傷が増えていきながらも、ようやく逃げないポケモンがいた。

「ガウー！」

「お願い、ハッピー！」

このガーデイがそうみたい。

はなこちゃんを見ても吠えてはいるけど、噛みついたり逃げ出した炎を吐いたりしない。

「ハッピー、はたく！」

「プク！」

「ガウー！（ヒュン）」

はなこちゃんのピンプクがはたくを放つけど、ガーデイはその攻撃をギリギリでかわす。

「おー、なかなか動体視力が良さそうなガーデイですな。」

「やすなちゃん、何キャラなの……?」

私とゆのちゃんは介入するわけにもいかないから、見守っている。

無事に捕まえられればいいんだけど……。

「ガウツ！」

「はなこちゃん、かえんぐるまが来るよ！」

「ハッピー、かわしてあまえて！」

「プク！プク！」

かえんぐるままで突っ込んでくるガーデイをジャンプでかわして、甘えるを放つ。

甘えるは受けたポケモンの攻撃を大きく下げる効果があるから、かえんぐるまで受けるダメージも下がるはず。

「ガー！」

「ハッピー、はたくで受け止めて！」

「プック！」

ガーデイは次にとっしんをしてきたけど、さっきのあまえるで攻撃力が下がっていたからか、はなこちゃんのピンプクのはたくとぶつかり、打ち消される。

「チャンスだよ！もう一回はたく！」

「プク！（バシン）」

「ガアウツ！」

ガーデイが体勢を崩した隙にもう一度はたくを使い、今度こそ頭にクリーンヒットさせる。

ダメージを結構受けたみたいで、フラフラしているガーデイ。

「えいつ！モンスターボール！」

そこにすかさず、はなこちゃんがモンスターボールをシュート。

ガーデイに当たり、ゆらゆらと揺れるボールを見つめてる。

やがて、ゆのちゃんの時と同じように、静止するボール。

無事にゲット出来たみたいでなによりだね！

「この子の名前は・・・私をはじめてゲットしたポケモンだし、ミラクルにしよう！これからよろしくねミラクル！」

ガーデイが入ったボールを回収し、ニックネームを決めるはなこちゃん。

おめでどう！

そして、同じく旅をしているトレーナーから挑まれるポケモン勝負を3人で順番に応じつつ、ビジブシティへ歩いていく。

・・・でも、はなこちゃんがガーデイ捕まえたあたりから、勝負を

挑んでくるトレーナー、かなり多くなってるない？

「えっと・・・どうやらビジブシティ寄りの303番道路では、ジム戦で勝つために修行するトレーナーが多くて、別名ジムの予戦道なんて言われてるんだって。・・・まあ、ビジブジムには予戦なんてないんだけどね。」

「それだけトレーナーが多いなら、ポケモンの調子を見て断らないとかな・・・？」

「え？ポケモン勝負って断っていいの・・・？私、目と目が合ったらポケモン勝負！っていうし、よほどのことがないと断れないって思ってた・・・。」

「私は小平先生に、ポケモン勝負はポケモンの調子を考えて受けるか決めましようって教わってたから、知ってたよ！」

「というか普通に考えて、たまたま目が合ったら誰かれ構わずポケモン勝負なんて、蛮族にも程があるよね・・・。」

「うっ・・・。確かに・・・。」

そんなにバトルばっかしてたらポケモンも疲れすぎちゃうよ。

私達は3人だから、わりとちよūdいんだけどね。

おかげで、今のところ負けなし（ドヤツ）。

「というか、ジムは氷タイプみたいだね。」

「うん！さっそくミラクルが活躍してくれるはずだよ！」

「私のよろいだって活躍するはずさ！」

まあ、ジムリーダーなら苦手なタイプの対策はしてると思うけど、私とよろいなら大丈夫！多分！

「ちよūdといいい？あなた達は新米トレーナー？」

「え、はい、そうですけど・・・。」

ゆのちゃんはなこちゃんと話してたら、またバトルっぽい。

前回私が戦ったし、今回はゆのちゃんの番！

「私は月刊きららの記者で、漫画家でもある色川琉姫よ。今月の記事で、新米トレーナーにインタビュールした記事を出そうと思ってるの。よかったらお願い出来ない？」

と思ってたけど、あれ、違う・・・？

琉姫さんと名乗った、紫色の髪をした綺麗な女性は、月刊きららの記者らしいけど……って月刊きらら!?

「それはいいですけど……。どうして私達だったんですか?」

「ここでビジブジムに挑むために特訓しているトレーナーから、あなた達のことを聞いたのよ。」

「さすが私達!」

「この先のビジブに向かっていているということは、あなた達3人もビジブジムに挑むつもりなの?」

「いえ、私はコンテストです。やすなちゃんとはなこちゃんがジムで……。」

「私もはなこちゃんも勝つつもりですよ!」

「うん!はじめてのジムバッチ、ゲットするよ!」

「ビジブジムが氷タイプなのはもう知ってるわよね?」

「知ってますよ!だから私のよろいが活躍してくれるはず!」

「……よろい?えつと……?」

「あ、よろいというのはやすなちゃんのシユバルゴのニツクネームですよ!」

「あ、シユバルゴのことなのね……。確かに鋼タイプだから、氷タイプには相性抜群を取れるわね。でも、ビジブジムはそれだけでは到底勝てないと思うわ。」

「というと……?」

「私は直接戦ったことはないけれど……。私の友達のつーちゃんから聞いた話だと、ジムリーダーはかなりトリッキーで美しい戦いをするみたいなの。シンオウ地方のジムリーダーのメリツサさんみたいに元トップコーディネーターというわけではないけれど、コンテストにも通用するほどつーちゃんが言ってたわね。この先のジムリーダーにも同じことが言えるけど、タイプ相性で有利だからといって慢心していると、痛い一撃を喰らうことになるわよ。」

「ほへー……。」

「具体的なことは言えないけど、予測していない攻撃が飛んできた際に、いかに冷静に対処出来るかも重要になってくるといったところかし

ら。」

予測出来ないような攻撃、か……。

氷タイプなら……氷の鎧をまとってパワーアップ!とか?

でも、考えるのは後!

アドバイスのあとすぐに、旅立った目的やきつかけ、連れてるポケモン、心意気など色々質問されたから、ソーニャちゃんに私の思いが届くようにメッセージも書いておくのだ!

……ソーニャちゃんが見てるかわかんないけど。

## 第七話 「303番道路！琉姫からの取材バトル！」

「・・・さてと。インタビューはこれくらいいいわね。でも、ポケモントレーナーが相手を知るなら、やっぱりこれよね？」

10分くらいインタビューをした後、ボールをひとつ出して、軽く微笑む琉姫さん。

ポケモンバトル・・・ってことだよね？

「あ、なら私が・・・。」

「えっと、良ければジムに挑む2人のどちらかと戦わせてもらってもいいかしら・・・？」

次順番だったゆのちゃんが受けようとするも、琉姫さんは私かはなこちゃんと戦いたいみたい。

だったら私が！

「なら私が！」

「やすなさんね。そこまでガチガチに戦いたいわけでもないから、1VS1のバトルでもいいかしら？」

「問題ないです！」

そうなると・・・よろいは先程からバトル続いてるし・・・。

「ぽんやり！出番だよ！」

「ヤーン」

「・・・あら？てつきりシユバルゴで来るのかって思っていたのだけど・・・。それならパチリス、頑張っ！」

「チパー！」

琉姫さんはパチリス・・・。

私のぽんやりは相性不利だしどうしようかな・・・。

「ぽんやり！みずてっぼう！」

「パチリス！かわしてほうでん！」

「ヤーン」

「チパー！（パチパチ）」

「ぼんやり！かわして！」

「・・・ヤーン」

う、動かない・・・。

みずてっぽうはすぐ出してくれたのに、かわす指示をしても一歩も動かないよ・・・。

当然、ほうでんは直撃。

みずタイプにでんきタイプはこうかばつぐんだから、結構ダメージを受けたはずだけど・・・。

「・・・あれ？」

ぼんやりびくともしてない。

・・・？

「弱点技受けてびくともしないなんて、結構丈夫なポケモンなのね。ならパチリス、もう一度！」

「チパ！」

「次も避けてくれなさそうだし・・・じゃあサイコネシス！」

302番道路でよろいとチラーミイがとじこめられた檻を破壊したのがほんとにこの技なら、ほうでんを打ち消して攻撃できるくらい威力はあるはず！

「・・・・・・」

「・・・アレ？」

指示をしたのに、今度は反応すらしてくれない。

やっぱり直撃をくらうけど・・・今回もびくともしてない。

・・・どうなってるの？

「・・・なんというか、あなたのヤドン、かなり独特な子みたいね・・・。」

「チパ・・・？」

琉姫さんとパチリスにも呆れられちゃってるけど、私にもよくわかってない・・・。

「とにかく、ただのほうでんで有効なダメージを与えられないなら、もっとパワーアップさせるしかないわね。パチリス、じゅうでん！」

「チパ！（パチパチ）」

「じ、じゃあ・・・ド忘れ！」

「……………」

は、反応しない……。

じゆうでんは確か、次のでんき技の威力が上がる効果だったと思うから、ド忘れで対抗させようと思ったんだけど、ほんとにきつきから微動だにしないよ……？

「パチリス、ワイルドボルト！」

「チパチ！」

「避けてぽんや』……ヤーン』ここでサイコキネシス!？」

「……！パチリス、避けて！」

「ヤーン（ドゴオン！）」

「チパーツ！チー……。（バタン）」

……えーつと、何が起こったのかがよくわかんないと思うけど、私のぽんやりがサイコキネシスを撃つたらまわりがどかーんつてなって、琉姫さんのパチリスが回避しようとしたけど回避しきれなくて、当たったら一撃でパチリスが戦闘不能になった。

よくわかんないと思うけど、私にもわからないのだよ……。

「……えーつと、勝負はやすなちゃんの勝ちでいいのかな？」

見ていたゆのちゃんも困惑した様子。

というかぽんやり、私の指示に従ってくれたのは最初のみずてつぽうだけなような気がするんだけど、気のせいじゃないよね……。

「……驚いたわ。少し聞きたいのだけど、このヤドン、捕まえてからどれくらい経っているのかしら？」

「捕まえたのは確か3日前で、302番道路ですけど……まだなついてないから言うことを聞いてくれないのかな……？」

「……そうでもないみたいだよ？」

「え？」

「ヤーン（ポヤーン）」

はなこちゃんがそう言ったから、ボールに戻してないぽんやりを見ると、なんかさらにぼけーってしてる。

これってもしかして……。

「これってまさか、ド忘れしてるのかな？」



「ヤドンというポケモンは感覚が鈍くて、痛みなどの反応が遅いのは知ってる？これは私の予想でしかないのだけれど、そのヤドンは反応が普通のヤドンよりもさらに鈍いのだと思うわ。」

「反応が、鈍い・・・？」

「ええ。もしくはサイコキネシスを撃つのに普通のヤドンよりもかなり時間がかかるという可能性も考えられるわね。その分威力が高いみたいだけど・・・。じゅうでんを使った私のパチリスを一撃で落とすとは思わなかったわよ。」

「え？じゅうでんって、でんき技の威力を上げる技じゃ・・・？」

「やすなちゃん、じゅうでんにはでんきタイプの技の威力を上げる他にも、特防を上げる効果があるんだよ。」

知らなかった。

そんな効果があっても一撃だなんて、やっぱりこのぼんやりは凄かったんだ！

「遠いアローラ地方では、Zクリスタルというものを持たせて、トレーナーとポケモンが心を通じ合わせることで、威力が高い特別なZ技というものがあるそうだけど、それに匹敵する威力かもしれないわ。でも、その間無防備に近いことになると思うから、そこはトレーナーのあなたがカバーすることね。」

「はい、わかりました！」

ぼんやりを活躍させるにはトレーナーがすごくないといけない・・・。

私にピッタリだ！

「それじゃ、私はそろそろ帰って記事を書くことにするわ。いいものが書けそうだわ、ありがとうね。よければまた取材させてくれると嬉しいわ。またね。」

私達にお礼と別れを告げて去っていく琉姫さん。

また会うことになるかもしれないね。

「じゃあ、私達も行くようよービジブシティはもうすぐだよー！」

「うん、そうだね。琉姫さんいわく、あと1時間も歩けば到着するんだよね。」

「明るいうちには着けそうかな？でもほんやりやよろいも疲れてるはずだし、ジム戦は明日にしよう！明日から本気出す！」

「やすなちゃん、それは本気を出さない人の言い方だよ・・・？」  
「うそうそ、冗談だよ。」

その後、トレーナーと戦いつつまっすぐ歩いてきたおかげで、日が暮れる前にビジブシティに到着！

早速ポケモンセンターに行きたいんだけど・・・。

「・・・この街のポケモンセンターってどこにあるの？」

3人ともわかってなかった。

・・・この街複雑すぎるよ！

いろんなもんがあるし広いし！

「日が暮れる前にポケモンセンターに着けるのかな・・・？」

「地図でもあればいいんだけど・・・。」

「そうだ！それならあそこの人に道を聞いてみようよ！すみませーん！」

「はー、今日も見所ありそうな挑戦者おらんかったなあ・・・ん？うちに何か用なんか？」

はなこちゃんが声をかけたのは、しゃべり方が少し独特な女の人。

ひとりごとを呟いていたけど、私達の呼びかけには答えてくれたよ  
うでひと安心だ。

「実は私達、道に迷ってしまって・・・。よかったらポケモンセンターまでの道のりを教えてもらえませんか？」

「あー、あんたらはこの街の人やないんやろ？この街は複雑やからなー。ポケセンはこの道を左に2回曲がればあるでー。」

「ありがとうございますー！」

「ちなみにジムはポケセンから北へまっすぐ行けば着けるから、気をつけて行きいよ。」

「・・・あれ？私達、ジムについては聞いてなかったような気がするんだけど・・・？」

「まあまあ、必要な情報を教えてもらえたんだしラッキーだよ！」

「そうそう、はなこちゃんの言う通り！」

「ほな、じゃーなー。」

「ありがとうございますー。」

去っていく女性にお礼をし、私達はポケセンに向かっていった。

明日、私達はジム行くぞ〜！

それではじめてのジムバッジをゲットするんだ！

## 第八話 「ビジブシテイ! はじめてのジム戦!」

「たのもー!」

「やすなちゃん、もうちよつと普通に行くべきなんじゃ……。」

翌日。

私達はジムバッジをゲットするためにビジブジムを訪れていた。

話し合った結果、私から先にジムリーダーに挑むことに!

「おー、やはり来よつたな。昨日はポケセンにたどり着けたんか?」

「あ! 昨日の道を教えてくれた人! ジムリーダーだったんですね!」

「そうや。ウチがビジブシテイジムリーダー、芦原ちかこや! どつかで聞いているとは思うが、氷タイプの使い手やで!」

「知ってます! 勝つてはじめてのジムバッジをゲットしますよ!」

「おーおーその意気や! そういうの、嫌いやないで! 魚住、ルールの説明を頼むで!」

「わかった。では、ルールの説明をします。このジムでは2VS2のシングルバトル。先に2体とも戦闘不能になった方が敗北となります。なお、ポケモンの交代は挑戦者のみ可能となります。」

「ということや。それで、最初に挑むのは誰や?」

「私!」

「ほんなら、金髪の娘とバツテンの娘はその階段から見学席に行くとなえで。そんで、最初の挑戦者の娘はもうちよい前に入るんや。」

「ごくり、なんだか緊張する……。」

トレーナーが立つ、白い四角の枠に囲まれた場所に立つと、緊張してきた……。

「それでは、ただ今より挑戦者対ジムリーダーの公式ジムバトルを開始します!」

「出番や、タマザラシ!」

「お願い、ぼんやり!」

審判らしい魚住さん? が宣言すると、私とちかこさんは同時にポケ

モンを出す。

向こうはタマザラシ、こちらはぽんやり。

「タマザラシ……。みず、こおりだから、氷タイプの弱点である炎や岩タイプにも効果抜群な攻撃が出来るね……。」

見学席にいるゆのちゃんの声が聞こえてくる。

でも、ぽんやりもよろいも問題ない！

「先手は譲るで！どこからでもかかって来いや！」

「それならぽんやり！ド忘れ！」

「ヤーン」

サイコキネシスは撃つのに時間がかかるし、みずてつぽうもいまひとつ。

だからまずは、ド忘れで耐久力を上げる！

「なるほど、カウンター狙いか何かはわからんが、そつちからは攻めて来んつーことなんやな。なら行かせてもらおうで！タマザラシ、あられや！」

「タマー！」

ちかこさんはあられを放ち、氷の塊が降りだす。

確かあられは体力が減っていくはず……。

長期戦にすると不利……。

「だったら早速行くよ！サイコキネシス！」

なら、サイコキネシスで一気に勝負を決めに行く！

「タマザラシ、かわ……。いや、氷のアクアリングや！」

それを聞き、回避させようとしたちかこさんだけど、なにかを感じ取ったのかアクアリング……。ん？氷？

「えっ？何そのアクアリング……。？」

アクアリングは名前の通り、水の輪を身体にまとって、自分の体力を回復させる技なんだけど……。何故か氷の欠片の輪をまとっている。

私の知らない技なのかな？

見た目も綺麗だし。

「これはウチのオリジナルの技や。アクアリングを凍らせ、冷気をまとうことで回復しやすくなるんや。」

「そんな技が・・・。」

「それよりもサイコキネシス打たんの？なら準備をさせてもらうわ。タマザラシ、地面にれいとうビーム！」

「タマー！」

ちかこさんはれいとうビームで氷の壁を作っている。

もしかしてぽんやりのサイコキネシスを防ぐつもりなのかな？

ふふふ、甘いよ！

直撃すれば、いかにジムリーダーのポケモンとあろうと相当のダメージを入れられるはずさ！

よし、準備完了！

「ぽんやり、撃って!!」

「ヤーン」

ぽんやりが放ったサイコキネシスは、氷の壁をバリンバリンと砕きつつ、タマザラシに直撃。

やった！

「タマ・・・タマっ！」

「・・・ほう、やるやないか。うちのタマちゃんな体力を一撃でほとんど削るとは思わなかったわ。その技はほんとにサイコキネシスなんか？」

「一応そうですよ！威力は桁外れですけどね！」

「とはいっても、その技は連発できんようやな。そしてタマザラシはアイスボディの特性により体力がどんどん回復しとる！ここからどうするつもりなんや？」

・・・しまった！

回復されること考えてなかった！

「ちよつとやすなちゃん、『回復されるのを考えてなかった！』って顔してるけど大丈夫なの・・・？」

「だ、大丈夫大丈夫！まだ奥の手はあるから！」

・・・どうしよう、ない。

でも、さつきは氷の壁に阻まれてだから、直接当てれば倒せるはず！

「今度はこっちから行かせてもらおうで！タマザラシ、れいとうビームや！」

「ぽんやり！みずてっぼうで迎え撃って！」

攻撃がぶつかりあい、相殺される。

一瞬で凍りつくぽんやりのみずてっぼう。

「ぽんやりだと分が悪いかな……。戻って！そんでよろい！」

「シュバ！」

たとえこのままれいとうビームを防ぎ続けることができても、向こうはアイスボディで回復し、こっちは逆に体力が削れてく。

不利になるだけだからよろいに任せる！

「ほう、そのシュバルゴなかなか育てられとるようやな。タマザラシ、もう一度れいとうビームや！」

「よろい、かわしてつつく！」

れいとうビームという技は軌道が直線だから、回避は出来る！

あまり大きくかわさずに、最小限の動きで回避させ、そのまま攻撃

！

「転がって回避や！」

「タマー！」

「ならもう一度つつく！」

「甘いで！そのまま転がるや！」

「さっきの速度ならかわせ……。って速い!？」

「シュバツ!？」

「ころがるは時間が経つごとに威力が増す技やからな！さっきまでと同じだと思ったらあかんで！まだまだころがるや！」

「だったらアイアンヘッドで受け止めて！」

ころがるは確かいわタイプの技だったはず！

それに、このまま時間が経つてもころがるはどんどん強化されちゃうはずだし、氷のアクアリングで回復されちゃう！

「タマ……。！」

「シュバ……。！」

威力はほぼ拮抗していたみたいで、2匹はぶつかりあい、力比べに

なる。

頑張れよろい！

「シュバツ！」

「タマツ！」

やった！

押し勝った！

よろいのアイアンヘッドがタマザラシに命中し、ふっとぼす。

氷のアクアリングは盾みたいな性能を持つのか、威力は少し減衰したけど、相手も体勢を崩したところだったから、いいダメージが入ったはず！

「そのシュバルゴ、さすがなパワーやな。とはいってもうちのタマザラシも

負けんで！」

「いいえ、勝たせてもらいますよ！よろい！ダブルニードル！」

「タマザラシ、ひきつけてれいとうビーム！」

「そのまま押しきって！」

「シュバ！」

タマザラシのれいとうビームをシュバルゴのダブルニードルの一撃で相殺し、二撃目でタマザラシに攻撃を入れる。

この一撃で大きく吹き飛んだタマザラシは地面に落ちて、戦闘不能になる。

やった！

まず1匹撃破！

「ジムリーダーのタマザラシ戦闘不能！」

「ああっ！タマザラシがやられてしまった！」

「やった、やすなちやんがリードしたよ！」

「うぬぬ、次のポケモンも相性は悪いけど、そう簡単に負けるつもりはないで！出番や、アマルス！」

「ヒヨオオオ！」

ちかこさんの2体目はアマルス……えっと、知らないポケモンだ。氷タイプだったことはわかるんだけど、他にタイプがあるのかとか



がわかんないや。

「アマルス、いわなだれや！」

「よろい、後ろに避けて！」

いわタイプなのかな？

なんでもいいけど、攻撃は避ける！

「そこは安全地帯ではないで！ハイパーボイスや！」

「ヒヨオオオオ！」

「シユバ!？」

「な、なんだって！」

ハイパーボイスで吹き飛ばされた岩が、よろいに直撃する。

よ、よろい！

しかもそれだけじゃなくて、ハイパーボイスまで当たってるから、ダメージが！

さらに、理由はわかんないけど岩が凍ってる。

「シ・・・シユバ・・・！」

「ほう、まだ体力はあるみたいやな。」

「いわなだれはわかるけど・・・なんで岩に氷が・・・？」

「それは秘密や。」

「でも、いわタイプならよろいのアイアンヘッドが抜群なはず！」

「当てさせんで！ハイパーボイスや！」

うっ、ハイパーボイスは強力な音波の攻撃だから、広い範囲に攻撃されるせいで近づけない・・・。

「よろいは遠距離技がないし・・・戻って！そしてほんやり、もっかいお願い！」

「ヤーン」

「ほんやり、みずてっぼう！」

「ほう、遠距離には遠距離ということやな。ならハイパーボイスや！」

「そっから準備！」

みずてっぼうが打ち消されるのは想定してた。

だから、その直後からサイコネシスの準備をする！

みずてっぼうが散らされた時に少し目眩ましになるから、少しでも

受けにくいはず！

「またあれを撃つつもりやな！ならやられる前に倒すで！ほうでん！」

「えっ!?アマルスってでんきタイプの技使えたの!?!」

驚いたけど、ぽんやりはそう簡単にやられないよ！

放たれた電気がまわりの氷を光らせ、増幅し攻撃をするけど、ぽんやりは耐え続けてる。

そうして、ようやく貯まった！

距離もそう遠くないから確実にあたる！

「ぽんやり、サイコキネシス！」

「……今や！ミラーコート！」

……ああつ！

ミラーコートは特殊技を威力を増幅して返す技。

サイコキネシスは放たれたけど、ミラーコートで返され、ぽんやりは直撃する。

多少はダメージを通せたけど、ぽんやりも大ダメージ。

「ヤーン……」

「挑戦者のヤドン、戦闘不能！」

「ありがと、ぽんやり。ゆっくり休んで。よろい、お願い！」

ぽんやりもさすがに耐えきれず戦闘不能になっちゃったから、もう一度よろい、頑張つて！

「大きく動いて狙いをつけられないようにして！」

「相手の動きをよく見るんや！」

ハイパーボイスを撃たれないように、動き回って攪乱する。

近づかなきゃよろいは技を当てられないからね！

「そこや！ハイパーボイス！」

「右に大きく避けて、そこからアイアンヘッド！」

いまだ！

ハイパーボイスを次に撃つよりもよろいが攻撃する方が速いはず！

「回避や！」

「ヒヨオオ・・・ヒヨオツ!？」

「な、何やと!？」

「シュバツ! (ドゴオン)」

アマルスは回避しようとしたけど、さっきの返しきれなかったサイコネシスのダメージで体勢を崩し、回避は間に合わない。

やった、そのまま直撃!

「ヒヨオ・・・」

「ああっ! アマルス!」

「ジムリーダーのタマザラシ戦闘不能! よって、この勝負、挑戦者の勝利!」

「やったあ!!」

勝った!

はじめてのバッジゲット!

「久しぶりにいい試合が出来て楽しかったで。これがパレットバッジや。」

「やった! ジムバッジ初ゲットだ!」

「おめでとやすなちゃん! 私も頑張って勝つね!」

「あー・・・。ポケモンを回復させんといけんから、ちよおつと待ってくれへんか・・・?」

「挑戦者を待たせるわけにもいかないから、10分で済ませてこい。お前のポケモンならそんなくらいありや充分だろ。」

「言われんでもわかっとなるわ!」

そう言っつて、奥に消えていくちかこさん。

次ははなこちゃん、頑張っつて!

## 第九話 「ビジブシテイ！はなこの初ジム戦！」

「回復は済んだで！始めようやないか！」

やすなちゃんが勝利してから10分後。

ほんとうに10分で戻ってきたジムリーダーと、私も戦うよ！

・・・でもちよつと緊張してきたかも。

「それでは、ただ今より挑戦者対ジムリーダーの公式戦を開始します！ルールは先程と同じく、2対2の挑戦者のみ交代可能！」

「もっかい頼むで！タマザラシ！」

「お願い、ハッピー！」

ジムリーダーさんはやすなちゃんの時と同じく、タマザラシ。

私はハッピー。

「やっぱり先攻は譲るで！」

「じゃあ行きます！ハッピー、はたく！」

「プク！」

「タマザラシ、かわすんや！」

「まだまだ！ハッピー、はたく！」

「氷のアクアリングで防御や！」

何回かはたくを出して、回避が間に合わなくなったタマザラシが氷のアクアリングで弾く。

攻撃は防がれたけど、それなら！

「ハッピー、まねっこ！」

「プク・・・プクツ！」

「氷のアクアリングは氷タイプ以外にとってはむしろ毒やで！発想はええと思うが、どうするんや？」

「あつ！そ、それなら戻って！」

アクアリングを私も使えれば有利になるかなって思ったけど、そういうことになっちゃうのか・・・。

アクアリングの効果は戻せば消えるから、ここはミラクル、おねがい！

「ワウツ！」

「ほう、2匹目はガーディなんやな。」

「ミラクル、かえんぐるま!」

「回転技には回転技で対抗や!ころがる!」

私のミラクルとジムリーダーのタマザラシの技がぶつかりあう。

ころがるがいわタイプ技だったのもあって、相殺され、反動で2匹とも後ろに下がる。

「威力は悪くないようやな。でもころがるは撃つ度に威力が上がる技やからな!まだまだ行くで!」

「あ、そうだった!ミラクル、かわし続けて!」

1回目で互角なら、それ以降だと多分無理!

だったらかわし続けて、隙を見て攻撃する!

「ようかわすなあ……。みきりでも使つとるんか……。?」

「使つてない、よつ!ハッピー、次避けたらとつしん!」

「ワウツ!」

やった、当たった!

ころがるは5回目で威力が最大になって、6回目で戻るから、そこを狙ったのは正しかったみたいだよ!

とつしんは反動を受けちゃうけど威力は高めだから、いいダメージ入ったはず!

「なるほど、ころがるの弱点を理解したうえの回避だった訳やな。れいとうビームや!」

「かえんぐるまで打ち消して!」

タマザラシが撃つたれいとうビームと、ミラクルのかえんぐるまがぶつかりあう。

でも、相性的にこつちが有利なはず!

「タマツ!」

「ああつ!タマザラシ!」

「やった!またいいダメージ入った!」

やっぱりこつちが押し勝った!

さらに、追加効果でタマザラシはやけどに!

「ぐぬぬ、タマザラシ、あられとアクアリングや!」

「回復させないよ！ミラクル、とっしん！」

「まずい！回避や！」

回避されたからとどめはさせなかったけど、今ので回復は阻止出来た！

このまま！

「そこからかえんぐるま！」

「ワウツ！」

「しまっ、かわしきれん……！」

「タマ……。」

今度は命中し、恐らく残り少なかった体力を余すところなく削り取る。

倒れるタマザラシ。

「ジムリーダーのタマザラシ戦闘不能！」

審判さんが宣言する。

やった！

よくやったよミラクル！

「お疲れやで、タマザラシ。これで終わりやからゆっくり休んどきい。

アマルス！出番や！」

ジムリーダーさんが出してきたのはやっぱりアマルス。

アマルスは確か……岩だったはず！

ぼたんちゃんが前言ってた！

「いったん戻ってミラクル！ハッピー、出番だよ！」

いわタイプはミラクルにばつぐんだから、ハッピー、頑張つて！

「アマルス、ハイパーボイス！」

「ハッピー、まねっこ！」

「ピョオオオ！」

「プック！」

まねっこで出したハイパーボイスとハイパーボイスがぶつかりあう。

でも、むこうの方が強くて、こっちの技はあっさり跳ね返されてしまふ。

「そこからほうでん！」

「距離をとって避けて！」

「距離をとつても攻撃は当てられないで！いわなだれ！そしてハイパーボイス！」

来る！

やすなちゃんのシユバルゴにも使った、いわなだれの岩をハイパーボイスで吹き飛ばして攻撃する奴が！

「いわを避けつつ近づいて！」

「なるほど、そう来るんやな。悪くない選択だとは思うで！」

「ハッピー、その勢いのままはたく！」

「アマルス、そのまま！」

ハッピーの出したはたくはアマルスに直撃！

やった！

・・・って、あれ？

頭に当たったはずなのにあんまりダメージ受けてない・・・？

「つかまえたで！もう一度いわなだれとハイパーボイス！」

「あつ！ハッピー！」

「プクッ！」

至近距離で攻撃され、全部直撃しちゃう！

失敗しちゃった！

「プク・・・」

「挑戦者のピンプク戦闘不能！」

「おつかれ、ハッピー。ミラクル、おねがい！」

「ワウッ！」

ハッピーは体力多いほうじゃないから戦闘不能に。

もっかいミラクルがんばって！

「同じことや！いわなだれ！そしてハイパーボイス！」

「岩だけでも避けて！」

炎タイプは岩に弱いから、当たるとかなりダメージを受けちゃうはず・・・。

さっきのタマザラシとのバトルで消耗してるから、あまり良くない

からね……。

「そこでミラーコート！」

でも何故か、ジムリーダーさんはそこでミラーコートを使う。

どうしてなんだろう……？

「……あつ、そういうことなんだ！」

観察してみると、さつきからの技で出来ていた氷がハイパーボイスを反射し、それがミラーコートでさらに反射してる。

その攻撃が岩を吹き飛ばし、軌道が読めない……。

「ワウッ！」

そして、そのうちの岩のひとつに、ミラクルが当たってしまった。動きが止まったところに追撃される岩。

「ワウ……ッ！」

大きく体力を持つてかれたものの、なんとか踏ん張るミラクル。頑張つて！

「体力が少ないからこれで決めるよ！ミラクル、距離をつめて！」

「さっせんで！いわなだれ！」

「岩を飛び移つて！」

押し寄せてくる岩の上を移動し、攻撃を入れに行く。

体力が減つてピンチだけど、諦めないよ！

「空中じゃ回避も出来んやろ！上向いてハイパーボイス！」

「かえんぐるまで打ち消して、そこから起死回生！」

「!!」

さつきの戦いから見て気づいてたけど、アマルスが撃つハイパーボイスは、どうも氷タイプの特徴があるみたい。

だから、炎タイプのかえんぐるまなら押せるはず！

それに、きしかいせいはピンチの時ほど強くなる技だから、これで決めるよ！

「ワウッ！」

「ヒョオ……。」

ハイパーボイスを撃つばかりで動けないアマルスに攻撃が当たり、そのままアマルスはダウン。



ってことは……。

「ジムリーダーのアマルス戦闘不能！よってこの勝負、挑戦者の勝利！」

やったあ！

やすなちゃんに続いて、私もバッジゲット出来た！

「ワウワウツ！」

「やったねミラクル！ハッピーもありがとね！」

「お疲れさん、アマルス。ゆっくり休むんやで……。いやー、しっかしやりよるわあ。ほれ、パレットバッジや。」

「やったあ！」

「パレットバッジがあれば、ポケモンの技のいあいぎりで、小さな木を斬ることが出来るようになるで。まあこれはいあいぎり覚えとらんポケモンやと関係ないけどなあ。」

「まあ、私達には関係がないかな……。」

「ジムバッジには名前を書く場所とかないから、落とさないようしっかりバッジケースに入れとくんやで。」

「え、でも私、ジムバッジケースなんて持ってない……。」

「おい芦原、挑戦者がはじめてバッジを貰うジムリーダーが渡すんだろうが。」

「ああつ！そうやった！今すぐ取って来んと！」

「そうだろうと思ってさっき俺が2つとってきた。それで挑戦者達、これがバッジケースです。」

「ああつ、ウチが渡そうと思つとつたのに！」

「諦めろ。それでこのケースですが、大抵の攻撃ではびくともしないので、この中に入れておくことをお勧めします。」

「大抵の攻撃ってどんくらい？」

「普通のポケモンの攻撃では基本、傷ひとつつきません。さらに耐熱性にも優れています。」

ほへ……。

確かに固そうな見た目してるけど凄いだね……。

「次のジムとしては、この街の北にあるスクラシテイがおすすめで

す。」

「そうなんだ！じゃあ、そこ行こうよ！」

審判さんのアドバイスもあって、私達はスクラシテイに向かうことになったよ！

ひとつめのバッジは取れたけど、次も頑張らないと！

でも、その前にゆのちゃんのコンテストだね！

## 第十話 「304番道路!ピンチとヒーロー?」

「でも、私もはなちゃんも、勝ててよかったよねー。」

「ねー。危ないところもあつたけど、私もやすなちゃんも勝てたし結果オーライだね!」

「次は私のはじめてのコンテストか……。うう、今から緊張してきちゃったよ……。」

「まあまあゆのちゃん、今から緊張しててもしょうがないよ!新しいアピール思いついたんでしょ?」

そう。

ゆのちゃんは強いだけじゃなくて戦い方も綺麗なちかこさんとのバトルを見てて、アピール案が浮かんだみたい。

「うん、そうだね。ありがと、やすなちゃん。」

「あれ?あっち、なんだか人が集まっているけどどうしたのかな?」

「ん?……。あ、ほんとだ、なんだろう?」

「行ってみようよ!」

はなちゃんが指差した方向には確かに人ばかりが。

気になるから行ってみよう!

「……。人とポケモンが産まれたという時期は不明ですし、現在の姿になるまでの過程も知る術がありません。ですが、例えばオーベムというポケモンは、指を光らせることで、別のオーベムに感情や言葉を伝えることが出来ます。」

人だかりに近づいてみると、どうやら演説をしてる人がいるみたい。

何を話してるのかな?

「この他にも、ポケモン同士でのみ伝えられるメッセージは数多く存在します。そもそも、みんな知っているとありますが人間はポケモンの言葉を話せませんし、ポケモンは人間の言葉を話せません。」

その人の言葉。

ロケット団と名乗ったニヤースは人の言葉を喋ってた気がするけど、あれはどういうことなんだろう?

「ですが、ポケモンの言葉をもし理解することができたなら、それは素晴らしいことだとは思いませんか？ 私が所属する団体、『デイ・ドリーム』では、それを可能にするための研究をしております。」

よくわからないけど・・・なんかすごそうってのはわかった！

ポケモンと会話出来たらいい！

「ポケモンと人間。そして人間と人間。互いが互いをより深く理解することで、この世界はさらに良くなっていく。そうして争いが無くなれば、まさに白昼夢のような理想の世界になると考えております。デイ・ドリームの名を覚えていただけると幸いです。ご清聴、ありがとうございます。」

演説をしていた人が一歩下がり、頭を下げると、聞いていた人達からの拍手が浴びせられる。

私もゆのちゃんもはなちゃんも、いいと思ったから拍手したよ。

よろいと話してみたいし！

「・・・それで、次の街に向かうための道ってどこにあるの？」

「あつ、私が2人がジム戦してる時に調べといたよ。ジムから北西の方にあるんだって。」

「北西っていうと・・・どっち？」

「えーっと、こっちだよ。」

ゆのちゃんに連れられて歩いていくと、街の出口に。

これ、私だけだったら行けたのかな・・・？

まあソーニヤちゃんは多分迷ったんじゃないかな〜プププ。

「ちなみに、ここから次の街であるイオンシティまではどのくらいかかるの？」

「えっと・・・。今が昼過ぎだから、特に何もなければ明日の夕方くらいには到着するんじゃないかな？」

うへえ。

「ジャリボーイ達がいた場所から、だいぶ飛ばされちゃったわね・・・。」

「だな……。おいニヤース、ここはどこなんだ？」

「ここは多分、ビジブシティ北ニヤ。ニヤー達がジャリボーイと一緒にいた金髪ジャリガールのギャラドスに飛ばされた場所がコミルタウンニヤから……。エトリア地方をほぼ横断したことになるニヤ。」

「あのギャラドス、サカキ様に献上出来たら幹部昇進は間違いないだろうけど、俺達じゃ手に終えんだろうしな……。」

やすな達がビジブシティから旅立ってから数時間後。

例のロケット団の3人組は304番道路上空を気球でふよふよと飛んでいた。

どうやら、コミルタウンから飛ばされてきたらしい。

「そうね……。あのギャラドスの破壊光線はあたしのソーナンスもカウンター出来なさそうなもの。」

「ソーナンス……。」

ちなみに、破壊光線はそもそもカウンター出来ないが、ムサシのソーナンスは自分でカウンターかミラーコートか判断出来る、地味に優秀なポケモンである。

「……ニヤ？あの3人って、この前のジャリガール達じゃないかニヤ？」

「ん？どれどれ……。あ、ほんとだな。この前ってなんで失敗したんだったか？」

「途中まではよかったものの、すごい威力のサイキネシスに檻を壊されたあげく、通りかかったハウオウにやられたのニヤ。」

「そうだったわね……。まったく、日頃の行いがいいあたし達がなんであんな目に……。」

日頃の行いがいい人達は、他人のポケモンを奪いはしない。

「とにかく、それならあのジャリガール達のポケモンを奪おうぜ！」

「賛成ニヤー！」

「少し暗くなってきたし、今夜はここで休もうよー！」

「うん、そうだね。暗くなってからは危ないし……。」

「ゆのちゃんのごはんも楽しみ！」

暗くなってきたから、私達は休むことに。

キャンプだ！

「みんな、出てきて！」

「ごはんの時間だからね！」

全員手持ちを出す。

さて、私もゆのちゃんを手伝おうと！

そうしてちよつと目を離した時。

「シュバツ!？」

「チラツ!？」

「プツク!？」

驚いたようなポケモン達の鳴き声に振り返ると、網に包まれて連れていかれるところだった。

……まさか！

「なーっはっはっは!!」

「全部まとめてポケモンゲットだニヤ！」

「ロケット団!!」

『ロケット団!!』の声を聞き！」

「光の速さでやってきた！」

「風よ！」

「大地よ！」

「大空よ！」

「世界に届けよデンジャラス！」

「宇宙に伝えよクライシス！」

「天使か悪魔かその名を呼べば！」

「誰もが震える魅惑の響き！」

「ムサシ！」

「コジロウ！」

「ニヤースでニヤース！」

「時代の主演はあたしたち！」

「我ら無敵の！」

「二」ロケット団！「二」

「ソオーナンス！」

「んじやつ、ボールに戻される前につ、と。」

「この前の檻に、よろい達が入れられる。」

「・・・まずいよ！」

「よろい、アイアンヘッド！ぽんやり、サイコキネシス！」

「無駄ニャ！内側からの衝撃は完璧に吸収するのニャ！」

「ジャリガール達のポケモンは全部奪ったから、もう打つ手はないはずよ！あたし達の勝ちねー！」

「じゃ、かえ『チラチーノ、ロックブラスト！』・・・へ？」

「チラツ!!」

「こちらは絶体絶命で、ロケット団が撤退しようとした時、どこからそんな声と、ロックブラストが飛んでくる。」

「放たれた岩は檻に当たり、ヒビを入れ、ついには破壊する。」

「・・・！この声・・・！」

「二」なあーっ!「二」

「ゆのちゃんがなにかに気づいたようだけど、そっちはあと！」

「まずはよろいとぽんやりをボールに戻す！」

「二」ヤバそうだから、逃げる！「二」

「逃がさないよ！ミニロップ、スカイアッパー！」

「ミニミッ！」

「え、いくらなんでも届かないんじゃない・・・。」

「多分だけど、今気球は地面から30メートルくらいは離れてるから、ジャンプじゃ届かないんじゃない・・・って思ったけど、予想を覆し、そのミニミロップは気球にとらえ、風穴を開ける。」

「二」やな感じ〜!!「二」

「吹っ飛ばされてくロケット団達。」

「チラチーノとミニミロップのトレーナーのおかげで助かった・・・。」

「やあやあゆのっち、お久しぶりですなく！元気してました〜？」

「み・・・宮ちゃん!？」

私達のピンチを救ってくれたトレーナーは金髪で、明るそうな雰囲気をして、ゆのちゃんは宮ちゃんと呼んで呼んでみたい。

「およう？そっちの2人はゆのつちと一緒に旅をしてるのですかい？」

「うん、そうなんだ。紹介するね、やすなちゃんとはなこちゃんだよ。それで、助けてくれたのが私の親友の宮ちゃん！」

「宮子です。うちのゆのつちがいつもお世話になってるそうです。」

「あはは、宮ちゃんお母さんみたい〜！」

「あ、私、折部やすな！よろしく！」

「花小泉杏だよ！よろしくね！」

「いえいえこちらこそ宮子です。どうぞよろしく。私のことは宮でいいよ。またはよしこ〜！」

「・・・誰？」

よしこ・・・？

「あ、そうだ宮ちゃん、私達今からごはんにするところだったんだけど、よかつたら一緒にどう？」

「おー！それはそれは嬉しいことですなー！ゆのつちのごはんー！」

「うん、いっぱい食べてね。私達のポケモン助けてくれたんだし。」

「気にしないでいいよ。困った時はお互い様さー！」

ロケット団のせいで用意はまだ途中だったから、私達3人で急遽4人分作ることに。

宮子さんはテーブルに座ってものすごく楽しみそうに待ってる。

「はーい、宮ちゃん出来たよ〜！」

「わーい!!」

今日ゆのちゃんが作っていたのはカレーライス。

改めてポケモン達も出してみんなで食事！

「二！いっただーきまーす！」

「ひさしぶりのゆのつちのごはん、やっぱり美味しいですなー！」

「おかわりはあるから、たくさん食べて『おかわりー！』宮ちゃんやっぱり食べるの速っ！」

・・・マジック？



宮子さんの前の皿がいつのまにか空になってたけど……。

「はい、どうぞ。そういえば宮ちゃん、さっきのミニロップの跳躍凄かったけど、普通ミニロップってあんな飛べないよね……?」

「あ、それ私も気になってた!」

私とはなこちゃんの声が揃う。

「およう?よくわかんないけど、仲間にした時からあれくらいジャンプしてたよ?」

「生まれつきってことなのかな?」

「やすなちゃんのヤドンみたいってことだね!」

「あ、確かに!」

言われてみれば!

私のぽんやりもそうだ!

そんな感じで宮子さんと話しながら食事をした後、行く先が同じことがわかったから、一緒に旅をすることに!

やったね、旅仲間が増えたよ!

## 第十一話 「304番道路! はなことナゾノクサ!

「おはよー皆の衆! 今日もいい朝ですなー!」

「宮ちゃん相変わらずテンション高いね・・・。」

「そう言うゆのちゃんも、いつもより速く起きてなかった?」

「あはは、宮ちゃんと旅するのははじめてだったし、テンションが上がってたのかな・・・?」

翌日。

あの後そのまま4人で野宿し、旅と一緒にすることに。

宮子さんはちよつと変わった人だけどトレーナーとして凄い感じするから、いつかバトルしてみたいものですな。

4人で朝御飯を食べ、目指すはイオンシティ!

歩きながら会話する。

「そういえば宮ちゃんって、なんでイオンシティを目指してるの?」

「最近開店したそのレストランが絶品らしいのです! それは食べに行きたくなるもの!」

「・・・ジム巡りとか、コンテスト巡りじゃないの?」

「うん!」

ええ・・・。

ゆのちゃんは、『宮ちゃんらしいね』って顔で苦笑いしてる。

「でもゆのっちのコンテストも、2人のジムも応援してるよー?」

「ありがと宮ちゃん。」

「宮子さん、そんなに強いのなら、ジムも行ってみればいいんじゃない?」

「そうしてみたいのはやまやまなんですが・・・あいにくこちらにも事情がありますな・・・。」

「・・・?」

よくわかんないけどどうしたんだろう?

はなこちゃんも首をかしげてる。

「事情? どんな事情『ゴチン!』わあっ!」

そのことを質問しようとしたはなこちゃんの頭の上に、なにか青いものが降ってくる。

顔にぶつかり、中断されるセリフ。

「ちよつ、大丈夫・・・？」

「・・・うん！私は平気だよ！」

ソーニヤちゃんに技かけられまくってる私が言うのもなんだけど、はなこちゃんタフだね。

青いのはポケモンだったようで、はなこちゃんの頭の上で起き上がる。

「えつと・・・このポケモンはナゾノクサだったよね。」

「でも、なんでナゾノクサが頭上から降ってきたのでしょうか？」

「確かにそうだよね宮ちゃん。ナゾノクサって地面で生活するポケモンはずなんだけど・・・？」

「ならちよいと聞いてみることにしよう！ねえ、なんで落ちてきたの？」

「ナゾ、ナゾナゾナゾ。」

「ふんふん、なるほど、どうやら『木の上のきのみを取ろうと登ったら降りられなくなってしまった』ということらしいです。」

「え!?宮ちゃんポケモンの言葉わかるの!？」

「いやいやなんとなく伝わるだけだよゆのつち。」

「ナゾナゾ、ナーゾナゾ。」

『それでオニドリルに襲われて落ちたところ、この娘の頭の上だったから助かった、ありがとう』って言ってますな。」

「・・・ん？オニドリルに襲われ・・・？」

私達はほぼ同時に上を見る。

「クケエツ！」

オニドリルがいた。

・・・そりやそつか、襲われたわけだもんね。

下に落ちたら襲ってくるよね。

「ミラクル、この娘を守って！かえんぐるま！」

「ワウツ！」

そんななか、一番に反応したのははなこちゃん。

ナゾノクサを抱えたまま、ガーディをボールから出して、襲ってきたオニドリルからナゾノクサを守ろうとする。

そこまで強いオニドリルでもなかったみたいで、ガーデイのかえんぐるま1回で戦意を喪失したのかどこかに飛び去っていく。

「怪我とか大丈夫?」

「ナゾ! (ピョンピョン)」

はなこちゃんの問いに元気よく答えて、頭にのっかるナゾノクサ。

あ、もしかして気に入ったのかな?

「もしかして私の頭の上が気に入ったの? 私の頭でよかったら乗っていいよ!」

「ナゾッ! (ピョンピョン)」

「あ、でも跳ねるのはやめてほしいな……。頭がぐわんぐわんするよ……。」

「でもはなつち、もうすぐイオンタウンに着いちやうよ?」

「あ、そっか……。それなら、一緒に来る?」

「ナゾ! (ピョンピョン)」

「じゃあ、このモンスターボールに入る?」

「ナゾ!」

はなこちゃんが出したモンスターボールに、自分からぶつかるナゾノクサ。

ボールに入ってゆらゆらと揺れ、カチンと音をたてゲットが完了する。

「やった! じゃあこの子の名前はラッキー! こうやって会えるなんて、私達とついてもついてるよ!」

「おめでとはなこちゃん!」

「うん、ありがとう!」

こうして、ナゾノクサが新たにはなこちゃんの仲間に加わった。

やったね!

「そういえばゆのちゃん、次のジムのルールってわかる?」

「えーっと……。3対3みたいだよ。やすなちゃんももう1匹捕まえないとね。」

よし、私もポケモンゲットするよ!

……。まあ、304番道路はもう終わるから無理だったけど。

それから少し歩き、私達はイオンタウンに到着！

月刊きららに載ってたから知ってるけど、この街は『ツムギテイータイム』っていう企業が中心で紅茶が名産なんだって。

街からもふんわりと紅茶の香りが漂ってきてる。

「わーい！ごはーん！」

「宮ちゃん待ってー！私、先にコンテストの申し込みしないといけな  
いからー！」

「およ？それなら先にそっちをすませて食べにいきましょうではない  
か！」

「もちろん私達もついてくよ。」

「ありがと、みんなっ。」

みんなでコンテスト会場に向かうことに。

街の規模はそこまで大きくなかったようで、わりとすぐみつかつ  
た。

「うう、いざやるとなると緊張するよ・・・。」

「だいじょーぶ、ゆのっちなら平気平気！」

「そうそうー！リラックスして頑張れば行けるって！」

ゆのちゃんは頑張ってたからね。

見えないところでたくさん練習してたし！

「う、うん。ありがと、私、申し込んでくるね！」

ゆのちゃんが受け付けに向かっていく。

問題も特になくエントリー完了したみたいで戻ってくる。

「おまたせ。エントリー期間はけっこうギリギリだったみたいだけ  
ど、コンテスト開始は明日みたい。宮ちゃんが言ってたレストラン  
に・・・わあっ！」

「わー！急がなきゃエントリーが終わっちゃう・・・ふぎやつ！」

戻ってきたゆのちゃんがこっちを振り向いて言おうとしたところ  
に、結構なスピードで走ってきた誰かがぶつかる。

ゴチンと音をたて倒れる2人。

「いたたたた．．．。」

「ごめんねっ！大丈夫？」

「う、うん．．．。そんなに走ってどうしたの．．．？」

「コンテストの申し込みをまだしてなくて．．．って、そうだ！すぐ申し込みをしないと！またね！」

呆氣にとられた感じのゆのちゃんを尻目に、ダツシユで受け付けに向かっていく彼女。

なんだつたんだろ．．．？

「ゆのっち大丈夫ー？」

「う、うん．．．。私は平気だよ．．．。でも、今の人誰だったんだろ．．．？」

「コンテストに申し込みって言ってたし、明日にでもまた会うんじゃないかな？」

「確かにそうかも。」

「それじゃあ、ゆのちゃんにも怪我はないみたいだし、宮子ちゃんの言っただレストランに行こうよ！」

「おー！もうお腹すきまくってますからな．．．。我限界なり．．．。」

宮子さんが限界そうだったし、みんなでレストランへ。

宮子さんが言うだけあって、とても美味しい料理だった！

ソーニヤちゃんに自慢してやらないと！

「では、お会計は合計で4万8000円となります。」

まあ、その分お高いから、財布はすっからかんになるけど．．．。でも何故か、財布からお金を出そうとしたところ、手で制された。

「．．．ところであなた方はトレーナーで？当店ではバトル好きのオーナーの意向で、お連れ様の一人がポケモンバトルで勝たれた場合、料金をいただくかないことになっております。負ければ倍額お支払い頂くことになりましたが、やっていかれますか？」

「はい！やりますー！」

「み、宮ちゃん．．．？もし負けたら私達、2万4000円づつ支払うことになるけど大丈夫．．．？」

「私、そんなに手持ちは……。」

「だいじょーぶでっせ皆の衆！……は私に任せてくれたまえ！」

宮子さんがそう言うから信じて任せてみることに。

結論から言っちゃうと、宮子さんが完勝だった。

2対1のバトルとなっただけ、宮子さんのチラチーノが全部一発で撃破。

強……。

とにかく、これでタダになったから宮子さん様様なんだけどさ。

その日はポケモンセンターで泊まり、明日コンテスト開催！

参加するのはゆのちゃんだけだけど、応援しないといけないよね！

## 第十二話 「イオンシティ！ゆのの悩みとコンテスト！」

誰かの足音でふと目を覚ます。

ゆつくりと目を開けても、まわりはまだ暗い。

「・・・あれ？まだ夜・・・？」

ベットから身体を起こし、横を見てみると、寝ているやすなちゃんとはなこちゃんが見える。

「・・・ソーニャちゃんは将来、落ちぶれる予知！」

「暁の門に咲く花？」

・・・ふたりとも、どんな夢を見てるのかな？

宮ちゃんは・・・あれ？いない。

トイレかな？

「せつかく起きちゃったし、目もなんか冴えちゃったから、少し散歩でしようかな・・・。んしょ・・・つと。」

ベットから起きて、ちよつと身だしなみ整えて部屋を出る。

ポケモンセンターは24時間営業だから、暗くなくて怖くないのがいいところだよね。

そうだ、ホットミルクでも飲もうかな・・・。

そんなことを考えながら、通路を曲がると、人影がいきなり飛び出してくる。

「ばあ」

「ぎゃあああああつー！」

ポケモンセンターに、私の叫びが響き渡った。

「うう、宮ちゃんひどいよ・・・。」

「ごめんごめん、たまたまゆのつちをみかけたからちよいとおどかしてみたくなりました・・・。」



それから少し後。

落ち着いた私は宮ちゃんと並んでポケモンセンターロビーの椅子に座っていた。

でも宮ちゃんひどいよ……。

「でも、宮ちゃんはなんであんなところにいたの?」

「おなかすいて目が覚めちゃいましたな……。ゆのつちこそどったの?」

「なんか目が覚めちゃって、眠れなかったから少し歩こうかなって……。」

「……もしかしてゆのつち、明日の緊張で目が覚めちゃった?」

「うん……。」

「私は旅立ってからのゆのつちを知らないけど、今のゆのつちを見れば頑張ってたのはわかるよ。いっぱい考えていっぱい練習してたんでしょ?」

「う、うん。そうだけど……だからこそ結果が出ないかもしれないのが怖くて……。」

「気持ちわかるけどだいじょぶだよゆのつち。あの時から頑張ってたんだし、私も夢を叶えられたんだから、ゆのつちだってきつと勝てるよ!」

「あれ、宮ちゃんがなりたいてって言ったのって……。」

「そのとーり!ゆのつちだけに教えるから、やすな殿にもはなつちも他の誰にも言っちゃダメだからね。私、今※※※なんだ。」

「ええっ!?!」

宮ちゃんが私にしか聞こえないくらいの声でさらりと言ったことに対して、私は驚きを隠せない。

「だからねゆのつち、夢は自分から『やめた』って言わない限り、なくならないんだよ。もし今回のコンテストで予選落ちしちゃったとしても、ゆのつちの夢は消えたりしないから、そんなガチガチにならなくていいんだよ。」

「そんなもの、なのかな……?」

「そんなものなのだよ。それに、緊張で固くなってたら力も発揮でき

ないよ?」

「そう・・・だね、うん。確かに宮ちゃんが言う通りかも。緊張も和ら  
いできた気がするかな。ありがとね、宮ちゃん。」

あれ、安心したらなんだか眠く・・・。

「あれ、ゆのつちおねむ? いや、寝ちやつて。私がベットまで運んで  
あげるから。」

ううん、自分でベットまで行くから大丈夫だよ。

そう言いたいのに、口が動かない。

意識が落ちてくなくな、最後に宮ちゃんが「おやすみ、ゆのつち。」つ  
て言ったのを聞いたような気がした。

そしてコンテストの開催日。

ちよつと寝坊気味で3人に起こされたけど、選手控え室まで移動す  
る。

頑張らないと・・・!」

今回は一次審査でチーくん、通つたら二次審査でりーくんってこと  
にするつもり。

「あつ! 昨日ぶつかった子だ! やっぱり出てたんだ! 昨日は大丈夫  
だった?」

頭のなかで最後のおさらいをしていると、誰かに話しかけられる。

顔を上げると、昨日ぶつかった人だった。

「あつ、はい、大丈夫でしたけど・・・。」

「それは良かった。私、平沢唯って言ってるんだ! よろしくね!」

「わ、私はゆのです・・・。」

「じゃあゆのちゃんだね! ねえねえコンテストは何回目?」

「それが、今回がはじめてで・・・。唯さんは経験あるんですか?」

「唯でいいし、もっと気楽な感じでいいよ! 私もはじめてなんだ! 一  
緒だね! そういえば、この街の紅茶は飲んだ?」

「じ、じゃあ……。名産なのは知っているんだけど、まだ飲んではいかな……。」

「ほんとに美味しいから、飲んでみるといいよ！私のおすすめはねー、『ふわふわティータイム』っていうカフェー！紅茶だけじゃなくてケーキも美味しいよー！」

「ふわふわティータイム……。うん、わかった。コンテストが終わってから行ってみるね。」

「その時は私が案内するよ！」

そんな話をしていたら、いつのまにか大会開始の時間。もうそろそろ番だね。

「私は18番目だけど、ゆのちゃんは何番目なの？」

「私は6番目だから、唯ちゃんより速いかな。」

「頑張ってるね！」

「うん、唯ちゃんも頑張ってるね！でも、負けるつもりはないよ！」

「ごっちこそ！」

「でも、まずはお互い一次審査突破だね。じゃあ、私はそろそろ行かないと。」

「うん、決勝でまた会おう！」

一次審査のアピールタイムはせいぜい1分か2分くらい。

だから、大会が開始したらわりとすぐ、私の番が回ってくる。

案内されて、私の番。

ステージに出ると、たくさんの人達が私に注目してる。

(……。あつ、あれって……。)

その視線で緊張し、ガチガチになりかけた私の視界に、『ゆのちゃんファイト！』と『ゆのっちガンバ！』って文字が目に入る。

(……。ふふっ、絶対やすなちゃんと宮ちゃんだ。)

その横には私を応援してくれているはなこちゃんの姿も見える。

見てる人のなかでも、いっとう目立つそろ応援に、つい少し笑っちゃう。

でも、そのおかげで、私の中の緊張は溶けていった。

ありがとね、みんな。

### 第十三話 「イオンシティ！二次審査のコンテスト！」

「ふう、なんとか予定通りに出来たと思うけど……。」

一次審査のアピールが終わって、私は今待機してた。

椅子に座って備え付けられたモニターで、他の人のアピールを見ていたけど、唯ちゃんはギターとコロトックでアピールしてた。

聞いてて心地よい感じの音楽だったから、唯ちゃんは多分一次審査通ると思うけど、私はどうなんだろう……。

あ、そういえば23番の出場者のキャンディ・ムサリーナさん、どこかで見たような気がするんだけど、私どこで見かけたのかな？

「……あつ、ゆのちゃんだ！アピールお疲れだね〜！」

「うん、唯ちゃんこそお疲れさま。アピール良かったよ。」

部屋に入ってきたのは、さつきも話した唯ちゃん。

「そういうゆのちゃんだっていいアピールだったって！」

「そ、そうかな？」

「うん、そうだよ！自信もって！」

そうやって唯ちゃんと話していたら、いよいよ一次審査通過者の発表タイムに。

うう、緊張するよ……。

「お待たせしました！一次審査を通過したのは……この8名です！」

司会の人画面をさすと、そこに表示されていく。

その中に、私の顔は……。

「あつ……！あつた！」

「やったねゆのちゃん！私も進めたよ！」

あつたよ！

やった、一次審査通過出来たんだ！

唯ちゃんもしっかり通過出来る。

「そして、対戦カードは……このようになりました！」

司会の人ふたたびスクリーンを示すと、私達のカードが並び替え

られ、トーナメントが作られる。

えーっと、私の相手は・・・わっ、眼鏡おつきい。

顔の半分くらいの大きさの丸眼鏡をかけた、大人しそうな少女だった。

「唯ちゃんとは・・・決勝まで当たらない感じだね。」

「あ、ほんとだ！じゃあ決勝で戦おう！」

「うん、頑張って勝ち抜くね。」

「じゃ、私は準備してくるから！」

そう言つて、去つていく唯ちゃん。

私も、リーさんの調子を確認しないとね。

二次審査は明確な演技とかはないけど、やすなちゃんやはなこちゃんも練習したから大丈夫なはず・・・。

そう信じて待っていると、私の番が来る。

ちなみに唯ちゃんはキャンディ・ムサリーナさんとの戦いだったけど、ムサリーナさんのハブネークの攻撃も利用して音で魅せて、そこそこの差をつけて勝つてた。

うう、緊張する・・・。

「それでは第三試合、かたやゆのさん、こなた如月さん！」

「よ、よろしくお願いしますね・・・。」

「は、はい、よろしくお願いします・・・。えっと、お手柔らかに？」

「それでは、バトルオフ！」

司会の人の声とともに、モニターのタイマーが5分から動き出す。

・・・よしっ、頑張らないと！

「お願い、リーくん！」

「お願いしますっ、ヨマワル！」

相手が出てきたのはヨマワル。

ポケモン図鑑は今は出せないけど、ゴーストタイプなのはわかるしチーくんじゃなくてよかった・・・。

「りーくん、スパーク！」

「ヨマワル、まもってください！」

ゴーストタイプにはノーマルタイプの技は効かないからでんき技撃ったけど、相手は守るで防ぐ。

「おっとヨマワル、コリンクのスパークを守るで防ぎました！」」

司会の人の実況とともに、私のゲージがわずかに減少する。

このルールだと、攻撃を当てられなくても今みたいに点数が減っちゃうことがあるんだよね。

「ヨマワル、ナイトヘッドです！」

「りーくん、ジャンプして回避して！」

「上に向かって鬼火です！」

あつ、空中だから動きが制限されちゃってる……！  
だったら……。

「りーくん、スパーク！」

りーくんのスパークとヨマワルの鬼火がぶつかって、電撃と鬼火が弾ける。

「ここでゆのさん、鬼火をスパークで相殺してきました！弾ける電撃で魅せてきています！相手の攻撃も利用したパフォーマンス、お見事です！」

「あの、ごめんなさい、偶然なんです……。」

司会の人がそう思ってるみたいだけど、狙ってなかったんです……でも、それで相手のゲージは減少して、逆転出来ただけ……。

「りーくん、なきごえ！」

「きゅーっ！」

「ヨマワル、鬼火です！」

「ヨマー！」

「りーくん、かわして！」

鬼火を受けるとやけどになって、どんどん体力が削れちゃうから受けないようにしなきゃ……！

でも、逃げてばっかじゃポイントが減っていつちやうから、タイミングを見て攻撃しないと。

でも、たいあたりはゴーストポケモンには効かないし……。

「ヨマワル、ゴーストダイブです！」

「ヨマ。」

「消えたっ!?!」

「きゅっ!?!」

考えてると一瞬のうちに、相手のヨマワルの姿が消える。

まわりを見ても、ヨマワルの姿はない。

どこいったの？

「……ヨマ。」

「きゅっ!?!」

「おっと、消えたヨマワルはいつのまにかコリンクの後ろに！ゆのさんのコリンクに一撃を入れました！」

「りーくん、スパーク！」

「ですがゆのさんのコリンクも負けていない！如月さんのヨマワルに即座に反撃！そうしつても魅せることも忘れてない！どちらもお見事！」

得点がどちらも減少する。

時間はもう残り1分くらい。

まだ私が勝ってるけど……逆転も充分ありえるからね、気を抜かないようにしないと。

相手のヨマワルの技もわかったし……。

「ヨマワル、ゴーストダイブですっ！」

「うう、また……。」

さつきと同じように姿を消すヨマワル。

「りーくん、動き続けて！」

動き続けてれば、攻撃も当たりにくいはず！

「……ヨマ?。」

「りーくん、スパーク！」

「きゅっ！」

動き回るりーくんに攻撃を当てられなかったようで、からぶつたヨマワルにスパークが飛んでく。

やった！

「ヨマ……。」

スパークが当たり、落ちるヨマワル。

これでポイントがさらに減って……。

「ここでタイムアップ！勝者は……ゆのさんです！」

そこで時間が終わる。

……やった、私、勝った！

「ありがとうございました。うーん、もつと頑張らないとですね……。」

「こちらこそ、ありがとうございましたよ。」

僅差だったし、ひとつ歯車が違ってたら負けてたかもしれないから……。

機会があつたら話してみたいかも。

そしてその後、準決勝も無事に勝って決勝に。

唯ちやんも決勝に上がってきたから戦うことになったけど……勝てるかな？



## 第十四話 「イオンシティ！決勝戦のコンテスト！」

「さあ、いよいよイオンコンテストも大詰め！決勝に進出したのは、かたや唯さん！こなたゆのさん！果たして優勝はどちらになるのでしょうか！」

「負けないよ！」

「私だって！」

唯ちゃんもそうだけど、私だってはじめてのリボンがかかっているし勝ちたいもん！

「それでは、バトルオフ！」

「お願い、リーくん！」

「出番だよ、コロトック！」

唯ちゃんは一次審査の時からずっとだったコロトック。

そして私はリーくん。

「リーくん、スパーク！」

「コロトック、れんぞくぎりだよ！」

「コロッ！」

唯さんのコロトック、ゆのさんのコリンクの電撃をれんぞくぎりで散らす！攻撃技をうまく防御に使用しました！」

まずはスパークが防がれ、私のポイントが減少する。

でも1回戦みたいにやられっぱなしにはならない！

「リーくん、そのままたいあたり！」

「コロトック、地面にねばねばネットしてから避けて！」

「きゅっ!?!きゅーっ！」

「さらに本来なら交代することで効果を発揮するねばねばネットを、コリンクの攻撃位置に合わせて置くことで当ててきました！お見事！」

「リーくん、とにかく暴れて抜け出して！」

唯ちゃんのコロトツクに置かれたねばねばネットで私のりーくんの動きが絡めとられちやつて動けなく。

まずいかも……。

りーくんが暴れても、ネットがとれない。

「……あつ、そうだ！りーくん、じゆうでん！」

そつか、でんき技で一気に吹き飛ばせばいいをだ！

でもかなりネットが強そうだったから、多分りーくんのただのスパークだと破れない。

だったらじゆうでんして一気に！

「コロトツク、うたうだよ！」

「りーくん、スパーク！」

充電で威力が上がったスパークがコロトツクのネットを吹き飛ばし、うたうをかわすことに成功。

ほつ、危なかった……。

「コロトツク、ジャンプしてれんぞくぎりだよ！」

「りーくん、転がりながらスパーク！」

スパークを転がりながら撃つことで、まわりに電気が竜巻のような形になって飛んだコロトツクに攻撃が入る。

旅立ちの日のちよつと前、シンオウ地方のポケモンリーグでシンジさんというトレーナーが使ったのをコンテストにも使えそうだと思うってりーくと特訓したけど、決まってよかった……。

「うーん、ねばねばネット！」

「左に避けて！」

喜んでる暇もなく唯ちゃんのコロトツクが上から覆うようにねばねばネットしてきたから、慌てて左に避けさせる。

じゆうでんからのスパークで破れたけど、あまりおんなじ技ばつか撃つてると得点が伸びなくなっちゃうからね……。

「なかなかやるね、ゆのちゃん！」

「唯ちゃんこそだよ！」

「なら、こんなのはどうかなっ？コロトツク、ハイパーボイス！」

「りーくん、避けて！」

「そのままれんぞくぎり！」

「きゅっ!？」

あっ!

ハイパーボイスをかわすためにジャンプしたところにコロトックがれんぞくぎりを放ち、リーくんは攻撃を受けてしまう。

吹っ飛ばされるも、なんとか耐えるリーくん。

「さらにそこからうただよ！」

「コロッ！」

そして私のリーくんが体勢を立て直してる間に唯ちゃんほうたうでアピール。

さらに、コロトックの腕をバイオリンのように使い追加で音を奏でる。

一次審査の時みたいに唯ちゃん自身がギターだしてはないけど、それでも私のポイントが減少。

「さあここで残り時間は約半分！現在のポイントは唯さんが勝ってます！このまま唯さんが逃げ切るのか、はたまたゆのさんが逆転するのか、勝負の行方は最後までわかりません！」

ここで司会の人によるそんな言葉。

どうしよう、このままじゃ負けちゃう……。

「リーくん、じゅうでん！」

「ならやらせないよ！コロトック、ジャンプしてれんぞくぎり！」

「中断して避けて体当たりだよ！」

「きゅっ！」

充電を封じるかのようにれんぞくぎりをしてきたコロトックの攻撃をかわして回り込んで、私のリーくんの体当たりが直撃。

「おっと、これはお見事！攻撃を華麗にかわし、見事なカウンターを決めました！」

「やっぱりやるね！じゃあねばねばネット！」

「かわして！」

唯ちゃんのコロトックのねばねばネットは再び地面に付着する。

あんまり置かれると動けなくなっちゃうな……。

「離れてもう一度じゅうでん！」  
距離をとつてもう一度じゅうでんをする。

りーくんの方が速いから、間に合うはず……！」

「コロトツク、うたうだよ！」

「当たらないようにして近づいて！」

距離をとつたことでアピール方法を切り替えて、歌うをする唯ちゃん。  
ん。

歌うで出ている音をうまく避けながら近づいていき、たいあたりをうまく当てるりーくん。

「むう、それなら後ろにジャンプしてねばねばネットだよ！」

「……！今だよりーくん！スパークで撃ち返して！」

チャンスだよ！

りーくんはさつきじゅうでんしてるから、ねばねばネットには負けないもん！

「コロツ!？」

「あわわ、落ち着いてコロトツク！落ち着いてネットをれんぞくぎりで切つて脱出して！」

私の狙い通りにねばねばネットが跳ね返つて、唯ちゃんのコロトツクに当たる。

「チャンスだよ、もう一度スパーク！」

「……！れんぞくぎりで少しでもダメージを防いで！」

コロトツクの鎌と、りーくんのスパークがぶつかりあう。

勢いは弱まったものの、スパークが押しきり、さらにダメージ。

それとともにゲージが減少し、ついに私が逆転！

このまま行ければ……！」

「……で残りの時間は一分となりました！現在、ゆのさんが逆転しわずかに有利！このリードを保ちゆのさんが勝利するのか、はたまた再び逆転して唯さんが勝つか！」

「りーくん、今のうちにじゅうでん！」

「……よしっ、脱出出来たっ！コロトツク、ネットに触れないようにダッシュユ！」

リークんのじゅうでんが終わったあたりでコロトツクがねばねばネットから脱出し、ダッシュする。

でも、リークんの方が速いはず！

「リーくん、おいかけてーたいあたりだよ！」

距離がどんどん詰まってく。

そして、距離があとわずかになった時。

「……今だよ！宙返り！」

「……！リーくん、後ろ！」

「れんぞくぎり！」

コロトツクが宙返りをし、今まで追いかけていたリークんの背後に着地。

そしてそのままれんぞくぎりで攻撃してくる。

私の声でリーくんは反応したものの、攻撃は受けてしまう。

「見事な宙返りでコリンクの背後をとったコロトツク、さらにその勢いのまま放たれた流れるようなれんぞくぎり！素晴らしい！」

「そのままうたう！」

そのまま歌うを使ってくる唯ちゃんのコロトツク。

音がリーくんに向かって流れていく。

残り時間は30秒もなく、ちらつと見たところ点数は唯ちゃんの方がわずかに多い。

ここで決めないと……！

ぶつつけ本番になるけど、やるしかない！

「リーくん、その場で回転しながらスパーク！」

「きゅっ！」

「おおっと、ゆのさんのコリンクが再びの回転スパーク！コロトツクが奏でる音と電気が重なりあい、見事なハーモニーを奏でています！相手の技を利用したアピール、これは点数が高い！」

……よかった、成功して。

私が安堵すると同時に、終了を告げる音が聞こえてくる。

「そしてここでタイムアップ！果たして優勝はどちらになるのでしょうか！」

やれるだけはやったし、最後のアピールも成功した……！  
唯ちゃんも私も、ドキドキしながら見る。

残っている点数は、わずかに私の方が多くのように見える。

つてことは……！

「イオン大会決勝を制し、リボンを獲得したのは……ゆのさんです！」

「や……やったあ！やったよりーくん！」

「きゅきゅっ！」

やった、やったよ、私達優勝できたんだ！

「うーん、負けちゃったか……。でもお疲れだよ、コロトツク。」

「コロ……。」

「負けちゃったけど、いい勝負だったよ！優勝おめでとう、ゆのちゃん！」

「ありがとう、唯ちゃん！こちらこそ、いい勝負だったよ！」

唯ちゃんと握手。

勝つたとはいっても、かなりギリギリだったし、負けてたのは私だったかもしれない。

本当にいい勝負だったよね。

「優勝したゆのさんには、コンテストリボンが授与されます！」

でも、疲れたせいで眠気が……ダメダメ、今寝ちゃ！

頭を振って眠気をこらえて、コンテストリボンを受けとる。

その場で倒れちゃいそうなのを我慢して会場から出ると……。

「「ゆのちゃん（ゆのつち）、おめでとう！」」

宮ちゃん、やすなちゃん、はなこちゃんがいて、私を祝福してくれた。

自分のことのように喜んでくれる3人のことが嬉しかったけど、私の眠気も限界で……。

「おつかれさま、ゆのつち。」

限界を迎え前に倒れそうになったところを、宮ちゃんが受け止めてくれる。

3人の声を聞きながら、私は眠りに落ちていった。

・  
・  
でも次も頑張らないとね。

## 第十五話 「イオンのどうくつ!いきなり一人旅!」

ゆのちゃんのコンテストも終わり、翌日。

私達は次のジムがあるスクラシテイに向かうため、準備をしていた。

スクラシテイに行くにはどうくつをひとつ抜けないといけなから、きずぐすりとか買っておかないと。

「あれ?そいういえばゆのちゃんは?」

「まだ寝てるんじゃないかな?ゆのつち昨日、頑張ったもんね。」

「うんうん、ゆのちゃん優勝できて良かったよね。」

「うん。ゆのちゃん頑張ってたもんね。」

あのあと緊張が切れたのか、私達を見るなり倒れるように寝てたし。

えーと、きずぐすりやモンスターボールも買っておかないとね。

ゆのちゃんの分まで必要なものを買ってポケモンセンターに戻ると、ゆのちゃんも起きててポケモンも元気になってた。

ゆのちゃんも準備はできたみたいだしじゃあ、早速みんなでイオンのどうくつに向かおう!

「・・・で、どうしてこうなったんだっけ。」

現在私は一人で右も左もわからないどうくつを歩き回っていた。

「ブック!」

「きゅっ!」

私と一緒にいるのは、ゆのちゃんのコリンクとはなごちゃんのピンブックだけ。

よろいやぱんやりはどこへ・・・?



起きた時にはいなかったけど……。  
考えてると、小さな岩が転がってきて頭に当たる。

「痛っ……あつー！今ので完璧に思い出したっ！」

どうくつでみんなでランチタイムをとっていたら、突然ゴローニャの大群が転がってきたんだった！

それで全員が散り散りになって逃げたら、私が逃げたところがガケで、転がり落ちて頭をうってたってわけか。

なくんだ、それならいつか。

「って良くない！」

ゆのちゃんとはなこちゃんと宮子さん、それにぼんやりとよろいを探さないと！

でも、ほんとにここはどこ？

まわりを見ても、岩、岩、岩。

人どころかポケモン1匹みつかからない。

「ゴロ」

「あれ？」

なんか足元から聞こえたような……？

「ゴロ」

「……この岩からだよね？」

さつき私に当たった岩を拾いあげてみる。

というかこの岩、まわりは茶色の岩なのに何故か青いよね……。

「……わっ!？」

「ゴロっ？」

ひっくり返してみると、黄色い目のようなものと視線が合う。

これっでもしかして、ポケモン？

ポケモン図鑑を起動してみると……ダンゴロって言うらしい。

なかなか可愛いかも！

「……でも、本当にここはどこなのかな？ゆのちゃん！はなこちゃん！宮子さん！」

さーん……さーん……さーん……。

大声で呼びかけてみるも、返ってくるのは私の声の反響だけ。

みんなどこ行っちゃったんだろ……。

「よろいもぼんやりもどこ行ったのかな……？このポケモン、ゲットしたいのに……。」

結構気に入ったからゲットしたかったんだけど……。

「きゅーきゅー！」

「……あれ？どうしたの？」

抱えてたダンゴロをおろし、諦めて歩きだそうとしたところでコリンクが声をかけてくる。

どうしたのかな？

「……あ、もしかしてバトルしてくれるの？」

「きゅっ！（コクリ）」

「じゃあお願い！」

えーっと……ゆのちゃんのコリンクの技は……。

「じゃあ、スパーク！」

「きゅっ！」

人のポケモンは指示を聞いてくれないこともあるみたいだけど、無事に聞いてくれるゆのちゃんのコリンク。

スパークがダンゴロに当たり、ダメージが。

「よしっ、ここにモンスターボール！」

怯んだ隙にモンスターボールを投げる！

ダンゴロを狙ったボールはまっすぐに目標に向かって行って……。

「きゅっ!？」

「あっ、ぐ、ぐごめん！」

もう1回攻撃しようとしたコリンクにヒットする。

他人のポケモンはボールに入れられないから弾かれたけど、それでバランスを崩したところにダンゴロの攻撃が入る。

あわわわわ……。

「今のは……なんだかわかんないけど、もう1回スパーク！」

ダンゴロから出た光の粒みたいなのがコリンクに直撃したけど、あんまり効いてなかったみたいだからもう一度スパーク！

「ゴロー！」

「かたくなるで防御されたみたいだけど、ボールを投げるよ！コリンクは離れて！」

「きゅっ！」

さっきの二の舞にならないように、コリンクに声をかけてからモンスターボール！

今度はコリンクに当たることもなく無事にヒット！

ボールがゆらゆらと揺れて、やがて止まる。

「やった、ダンゴゴロゲット！名前はがんせきだ！ありがとね、コリンク！」

「きゅっ！」

無事にゲットしたし、ゆのちゃん達を探そう！

！  
ここがどこかはわからないけど、落ちてきたから上を目指せば……

「つていつても、この崖はさすがに登れないよね……。」

私が落ちてきた崖はかなり険しくて、ちよつと無理そう。

ポケモンの技のロッククライムとか使えば登れるのかもしれないけど、無理だし……。

「そういえばこの洞窟、悪霊が封印されてるって噂もあるらしいんだよね……。うう……早く合流したい……。」

この洞窟、108の魂を喰らい、散々悪さをした悪霊が封印されてるって噂があるらしいんだよね……。

興味はあるんだけど、一人で行くのは……。

こういうとき、ソーニヤちゃんがいれば行ってもらえたのに。

なんか呪われそうだし、ソーニヤちゃんを身代わりにして……。

そんなことを考えていると、ドカーンとどこから爆発したような音が聞こえてきた。

「ぐぐぐぐめんなさいっ！……つてなんだ、殴られるかと思った……。」

ソーニヤちゃんに殴られるかと思って反射的に謝っちゃったけど、なんの音だろう……？

もしかしたらそつちに誰か人がいるかもしれないし、行ってみようかな……？

3人が来てるかもしれないし、いなくても会ったって人がいるかもしれないからね！

「……あつ、誰がいる！すみませーん！」

音がした方に行ってみると、黒い服とサングラスをした男の人とポケモンが、なんか掘ってる現場があつた。

よくわかんないけど、工事してるのかな？

「……仲間ではねえみてえだな。」

「……仲間？」

「どつちにしろ、見られたからには返すわけにはいかねえな。貴様には消えて貰おうか。」

「え、ええっ!？」

ええっ、なにになに!？

いきなり不穏すぎる！

「ドラピオン、掘削作業は一時中断だ、こいつのしま『このアツパラパー!』ごぶっ!」

「ええっ、今度は何!？」

いきなり私に口封じしようとした男が何者かに吹き飛ばされる。

「アンタは掘削作業やってなさい！」

「わ……わかりました姉御！」

「……えつと、助けてくれたんですか？」

「おめでたい思考してるわね、このアツパラパーは。アンタの呼吸音、心音、衣擦れの音以下省略、全部全部耳障りだわ。」

……ちがうみたい。

つてことはやっぱりヤバイ状況だよね……。

なんでこんなことに……。

「私は指揮者、アハテルノーテ。耳障りなアンタには消えて貰うわよ。行きなさいジャラランガ。」

「ジャアツ！」

「何をやってるかはわかんないけど、戦うしかない！なんとなくドラゴンタイプに見えるし、お願いピンプク！」

「プック！」

相手のポケモンは見たことないから何してくるかわからないし、警戒しないといけないよね。

「楽譜、激情的に！」

「ジャアツ！」

「音波!?後ろに飛んで！」

謎の指示とともにジャラランガから放たれた音波を見てとつさに退かせる。

はなこちゃんのピンプクもしっかり反応してくれて、攻撃をギリギリ回避。

隙を見て逃げたいけど、どうやったらいいかな・・・？

第十六話「イオンのどうくつ！いきなり一人旅!? Si  
deY」

「んう……え？わああああつ！」

目を開けた時、私の目の前にはものすごく大きくて牙が生えている口が。

「わ、私、食べても美味しくないです……！ちっちゃいし栄養少ないし……！」

後ろに下がろうとするも、壁があつて下がれない。

ポケモンを出そうにも、何故かモンスターボールもない。

わ、私ここで食べられちゃう……！

「クチ？」

「……えっ？」

そう思ったら、その大口がいきなり反転して、可愛らしいポケモンが。

「わあ……！可愛い……！」

「クチ。」

「……あれ？これ、私のバッグだよね？拾ってくれたの？ありがとね。というかやすなちゃんとはなこちゃんと宮ちゃんとどこに行っちゃったのかな……？」

そもそも、ここは……？

大顎の可愛いポケモンに渡されたバッグを受け取りつつまわりを見てみる。

やすなちゃんのシユバルゴとはなこちゃんのガーデイがいる以外は、私と大顎の可愛いポケモンしかない。

みんなどこに……あれ？

「わ、私のちーくんとりーくんがいない！2匹とも知らない!？」

「(ふるふる)」

知らないみたい……。

ボールはあるけど中にいないし、どこにいっちゃったのかな・・・？

「うーん・・・。私達はぐれちやつたみたいだけど・・・。」

やすなちゃんやんのシユバルゴやはなこちゃんのガーデイがいてもやすなちゃんやはなこちゃんがいないってことは、2人とも同じようにはぐれちやつてる可能性もあるかも。

そうになると、やっぱり探しにいく方がいいよね。

「よしっ！みんなを探しに行こっ！」

「ワウツ！」

「シユバ！」

ガーデイとシユバルゴも賛成なみたい。

目覚めた時にいた横穴のような場所から出て、洞窟を歩く。

「クチ。」

「・・・あれ？ついてきてたの？」

「クチー！」

なんでかわからないけど、さっきの大顎の可愛いポケモンがついてきてる。

どうしたのかな？

というか、このポケモンはなんていう名前なのかな？

「えっと、ポケモン図鑑は・・・あつた！」

ポケモン図鑑を起動し、大顎の可愛いポケモンに向けてみる。

どうやら、そのポケモンはクチートっていうみたい。

顎の力が凄くて、鉄も噛み砕けるポケモンみたい。

そんなクチート、シユバルゴ、ガーデイと洞窟内をしばらく歩いてみると、突然爆発音が聞こえてくる。

えっと・・・？

「もしかして、工事とかしてるのかな？」

でも、みんなとは関係なさそうだね。

それに音は来た方から聞こえてきたし……。

この通路わずかに登りになつてゐるから、このまま進んだ方が外に出られる可能性は高いと思う。

「ワウ………。ワウワウツッ！」

すると、前方を歩いていたガーディが突然吠えだす。

前を見ると……。

「わあああああッ！」

正面から地響きとともにたくさんのゴローンが転がってきてた。

あれに巻き込まれたら怪我しちやいそうだし、逃げないと！

来た方向へみんなで走る。

まっすぐな通路だから早く気づけたのと、傾斜がゆるいのもあつて、このまま走つてれば別の通路に逃げ込むのは間に合うはず……！

「……シュバー！」

「えっ？」

そう思いながら走っていると、やすなちゃんのリュバルゴが焦つたように後ろを示す。

振り向くと、けっこう後ろの方にいるクチート。

「もしかしてあのクチート、走るのが遅いの？」

少しだけ様子を見てみたけど、全力で走つてゐるっぽいけど全然進んでない。

このままだと追いつかれちゃうし……。

「だったら、頑張つて私が抱いて走るしかないよね……！2匹は先に行ってて！」

クチートの場所まで走つて戻り、クチートを抱き抱えてUターン。

結構大変だけど……頑張らなきゃ……！

「……あつ、分かれ道！でも、間に合うかはギリギリかも……。」  
少し走つたところに横穴がある。

でも私もクチートを抱き抱えて走つてゐるせいで速度が落ちてゐるから、間に合うかは微妙……。

「……！クチ！」



「えっ、クチート?」

そう考えていたら、私の腕から飛び出して地面に着地するクチート。

「クチ・・・!」

「えっ?」

そのまま側にあつた、私の8倍くらいありそうな大きさの岩を顎でつかみ、転がってくるゴローンと私達の間を塞ぐように置く。

ガアンガアンと岩にゴローン達がぶつかる音がたてつづけに響くも、岩は壊れることもなく私達を守ってくれた。

助かった・・・の?

「ありがとうね、クチート。でもこんな大きな岩を持ち上げられるなんて凄い力持ちなんだね。」

「クチ!」

「・・・あれ?岩をどかしたところに通路があるよね・・・?」

クチートがゴローンから身を守るためにどかした石の後ろに、新しい通路があつた。

既に分かれ道に避難してたやすなちゃんのシユバルゴとはなこちゃんのガーデイもこっちに来て、通路を覗きこむ。

「・・・!・・・!」

「・・・!」

すると、その通路の奥から聞こえてくるかすかな人の声。つまり、人がいるってことだよな。

行ってみようかな。

決めて向かつてみる。

すると、バトルしているやすなちゃんの姿が。

「あっ!やすなちゃん!」

「ゆのちゃん!ダメ、逃げて!」

「・・・えっ?」

「逃がすわけないでしょアツパラパー。楽譜、激情的に!」  
「ゴロツ!」

「ああっ、がんせき!」

「え、えーと……。よくわからないけど私も加勢した方がいいのかな？」

「きゅっ！」

「あつ、りーくん！よかった、無事だったんだ……。」

状況がいまいちわからないけど、りーくんがやすなちゃんのところから駆け寄ってくる。

そして、やすなちゃんに駆け寄っていくシュバルゴ。

「勝負の最中に気をそらすなんてアツパラパーね。楽譜、乱暴に！」

「ジャアッ！」

「……。クチー！（ガシツ）」

「あ、ありがとうクチート……。助かった……。」

自分のポケモンと再会し安堵してたところに相手の人のジャラランガの技（多分インファイト）が放たれたものの、クチートが顎でがっしりと受け止めて守ってくれる。

そのまま顎に力を入れ、ジャラランガの鱗を噛みちぎり、砕く。

「あのクチート、ゆのちゃんが捕まえたの？」

「ううん、私のポケモンじゃないんだけど、私を助けてくれたんだよ。」

「どっちにしても、今がチャンス！あの人達は何してるかはわかんないけど、見た人を消すとか言ってるから、倒して逃げないといけないからね！ありがとがんせき！出番だよよろい！」

「シュバー！」

やすなちゃんから説明を聞いて少し理解する。

とにかく、このバトルは勝たないとまずいみたい。

そう思うとほぼ同時に、私の方をちらつと見るクチート。

「戦ってくれるの？」

「クチー！」

「わかった、えーつと、使える技は……。じゃあじゃれつくだよ！」

ポケモン図鑑でクチートが使える技を確認して指示をだす。

確かジャラランガはかくとう、ドラゴンだからフェアリータイプの技であるじゃれつくがいいはずだよ！

直撃し、怯むジャラランガ。

「よし今だ！よろい、アイアンへ『楽譜、弾ける音府。』えっ!？」

怯んだところにアイアンヘッドで追撃しようとするシュバルゴだけど、謎の爆発で吹き飛ばされる。

ジャラランガは怯んでて攻撃できるような状態じゃなかったし、今のは……。

「相手の数もわからないうちから隙だらけの攻撃をしかけてくるなんてねえ?どう思う、エオリア?」

「そうねアイオニア。あなたと同じ意見よ!」

「意見発表まで3秒前!やっぱ省略!せーの!」

「このアツパラパー!!」

「きーっ!」

「やすなちゃん落ち着いて!挑発にのっちやダメだよ!」

気持ちわかるけど……。

やすなちゃんに奇襲をしかけてきたのは、ジャラランガのトレーナーと瓜二つな人とナツシー。

「改めて自己紹介でもしてあげようかしら。私はアハテルノート。双子の幹部よ。」

相手は双子だったようで、必然的にダブルバトルの形に。

大丈夫かなこれ……。